

第19回九州地区国立大学間合宿共同授業報告書

<https://doi.org/10.15017/21691>

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 19, 1994-12-05. 九州大学教養部
バージョン：
権利関係：

I. 第19回合宿共同授業を顧みて

第19回合宿共同授業を顧みて

九州大学大学教育研究センター長 原 田 溥

今年は殊の外の猛暑で、九重合宿の涼しさに大いに期待して筋湯に登ったが、日中は意外に暑く、夜半になってようやく涼風が吹き渡るというかんじであった。しかし夜空の星の輝きは九重ならではのもので、やはり山中に来たなと思わせた。

第19回を迎える今年の合宿共同授業は、当番大学が琉球大学、「九州・沖縄の自画像—過去・現在・未来—」をメイン・テーマとして、九州各地の国立大学の教職員38名、学生84名の参加を得て、7月9日から13日まで、4泊5日の日程で開催された。

さて私は大学での会議出席の必要から1泊2日の滞在しかできず、感想も極めて限定されたものにならざるをえないが、参加教職員の人達のお話から得たものも含めて、以下の感想を綴ることとする。

各個別講義がメイン・テーマに即して配置されていること、各講義についての討議、登山、懇親会等がスケジュールに組み込まれていること、いずれも例年どおりであるが、当番大学の英断で例年と違う大きな特徴が今回はあった。

それはフォーラム「九州・沖縄の若者と文化」の運営を学生主体に切り替えたことである。コメンテーターとして、琉球大学の山里先生をはじめ各講義の担当教官をお願いはするが、司会も報告者（参加10大学の代表10名）も全て学生としたのである。例年だとフォーラムは数名の教官が基調報告を行い、それをめぐって討論という形であるが、今迄の経験だと学生の発言はきわめて少なく、一方的な教官の発言に終始する事が多かったように思われる。しかし学生が必ずしも発表する意見を持ち合わせていないわけではないということは、これまでの報告書の学生の感想文からも窺えた。問題はフォーラムの運営の仕方ではないのか、そのことは私達の思いの底にいつもあったのだが、昨年からの企画委員会、実施委員会での琉大のオーガナイザー宮城先生を始めとする当番大学の先生方の思い切った提案と熱意が、今回のフォーラムに結実したといえよう。

学生主体の運営で3時間半の長丁場をのりきることができるかどうかという不安はあったが、宮城先生の報告にあるように、特定の学生諸君に意見、討論が偏ったとはいえ、「学生諸君の討論への積極的参加は、学生の豊かな可能性、個性、エネルギーを感じさせるに十分なものがあった」という成果を得ることができた。この成果を基にさらに来年、より一層発展させることができればと切に願わざるをえない。

さらにやはり講義の運営に関わることであるが、各個別講義について質問時間を20分程度とってもらおうという要望が、参加各教官の御協力を得て徹底化され、その趣旨が十分に生かされたことである。1日目の第1回の講義からの学生諸君による積極的で活発な質問は、講義が一方通行でなく教官と学生との一体化したものと、一定の充足感をもたらしたのではないかと思う。この成果もまた来年以降、十分に生かしたい。

私が教養部長として参加したこれまでの4回の合宿共同授業の中、雲ひとつない快晴で九重山頂まで登山できたのは、丁度5年前の平成元年、奇しくも琉球大学が当番大学の年、そして宮城先生にもその時お会いしたのだった。そして今年、九重は快晴つづきであった。私は2日目の昼ごろ、牧の戸峠まででかけたが、この快晴と暑さは、4日目の登山に際してかなりの配慮が必要と思われた。しかし、それは私の杞憂にすぎなかった。多くの人がこの報告書で述べておられるように、九大健康科学センターの山本先生の万全な指導と指示のおかげで、炎天下の九重登山にもかかわらず、一人の落伍者もださずに成功することができた。いま私のももとにとどいた九重登山の数々の楽しい写真は、夏の九重の素晴らしさを伝えている。

今回の合宿共同授業に関するアンケート調査をみると、80%以上の学生が共同授業に満足していると答えている。また「最初はただ単位をもらうため」とか、「楽しければそれで十分」と思って参加したのに、合宿の経過のなかで始めの考えは打ち砕かれ「自己変革」を告白する感想文や、「単位がなくても私は参加したいと今は思う程だ」というような感想文を読むと、合宿共同授業冥利につけるといえよう。

もちろん合宿共同授業の問題点をあげれば今回もいくつかあげる事はできよう。例えば九重の自然に触れる企画を組み入れるべきだとか、ゼミナール形式の少人数講義の必要性とか、学生が討論に参加しやすい具体的なテーマの設定とか等々である。それらは全てこれまでも検討され、部分的には実施された重要課題であり、今後も引き続き検討されねばならない。

だがそうした問題点をのりこえ、今回の合宿共同授業が成功し、皆さんが大きな充足感を抱くことができたのは、当番大学の教養部長、彌益先生、オーガナイザーの宮城先生を始めとする教職員の方々の本当に献身的な活動のお蔭であったことをここに深く感謝したいと思います。早く下山した為、琉大のあの踊りをみるができなかったのは実に残念だったが、初日の夜、研修所の屋上でその一端を垣間見ることができたし、また沖縄名物のドーナッツに似た大変美味しいお菓子も味わうことができた。

最後になりましたが、参加各大学の教職員の皆様の御努力と御協力で篤く御礼申し上げます。

第19回合宿共同授業を終えて

琉球大学教養部長 彌 益 輝 文

平成6年7月9日（土）から同13日（水）までの5日間にわたって九重の共同研修所で行われました九州地区国立大学間合宿共同授業は、この時期このような高原地ではまれなほどの高温と晴天に恵まれて無事その全てのスケジュールを終了して終わりました。主管大学の九州大学大学教育研究センター原田博センター長をはじめとして同事務部の皆さんには、企画調整をはじめとして様々のご配慮をいただき、また視聴覚機器などについても無理なお願いをお聞き届けいただいたことにつきましても当番大学としてあらためて感謝申し上げます。

今回の合宿共同授業のメインテーマ「九州・沖縄の自画像—過去・現在・未来—」およびフォーラム「九州・沖縄の若者と文化」の講義担当講師あるいはコメンテーター、毎年実施されている久住山登山の指導にあたってくださった九州地区国立大学の各先生方、また各地の大学からそれぞれ学生達を引率してくださった各大学の教職員の皆さん方には、合宿授業中の学生の日常的な生活にもいろいろと関わっていただき、厚い御礼と共に感謝申し上げます。

今回の合宿共同授業についての感想を書くよう依頼され、さてどんなことがあったろうかと考えてみました。この時期通常本州は勿論九州でも梅雨期の終りに近くよく大雨や天候の急変に見舞われる頃です。ところが今年は言われているように異常な高温と小雨が6月末から続いたため例年になく連日晴天となり、合宿中一度も雨に降られることがありませんでした。あまりにも高温でしたのでかえって久住登山には日射病や脱水症状の危険も考えておかねばならない状況でした。幸い学生さん達が登山指導の山本先生の注意をよく理解してくれ、合宿中を含め殆ど事故もなく終了できました。

各講義題目についての各担当講師の先生方の熱心で興味あふれる講義内容は勿論でしたが、講義に対する質問疑問に関しても例年になく活発な反応を示してくれたのではないかと感じました。フォーラムのテーマ「九州・沖縄の若者と文化」に関しましては、例年論議がなかなか活発化しないくらいがあるとのことで、学生の自発的発言を引き出すことを中心とした討議とするかたちになりました。オーガナイザーの琉大の宮城雄清さんの発案で参加各大学の学生さん達にあらかじめアンケートをとり、その結果を当番大学のフォーラム担当のコメンテーター山里純一さんを中心に幾つかの話題に分類したわけです。結果については、文化という概念が、この地域の特性、国際性、地域性、民俗性、伝統、歴史、社会活動など非常に広範な分野に関わる問題を包含しているということもあって、ある一面をとらえて絞って論ずることが難しいと言うことではなかったかと感じました。今後限られた分野に論点を絞りながら、関連する分野にさらに論議を広げていくことなどを考えたらと感じました。

現在九州地区の各大学では、大学改革の波が押し寄せています。教養部を置いている大学でもそうでない大学においても教養教育の将来がどうなるか非常に心配です。ただ、大学教育の中で幅広く深い教養を身につけることに関しては、21世紀をになう社会人となる学生さん達には欠くことのできない資質であると思います。九州地区の大学から集まって互いに親交を深めながら、ともに学ぶこのような合宿共同授業はこれからも続いていって欲しいものです。琉球大学では、授業に参加できる学生の年次は2年次を主としています。1年間の大学生活を体験し、ある程度学生生活に慣れた時点で他大学の学生との交流をとという配慮です。この点につきましては、次の合宿授業の企画の際にでも提案させていただくことになるかと考えています。

来年のこの合宿共同授業の企画が今秋早速主管大学九州大学を中心に、次の当番大学佐賀大学教養部のお世話で始まることとなります。今回参加いただきました各大学の教職員の皆様方には、私共の琉大教職員も含めてあらためて厚く御礼申し上げます。

星影さやかに 静かにふけぬ
つどいの喜び歌うはうれし



Ⅱ. 第19回九州地区国立大学間合宿共同授業実施要項

1. 目的 九州地区国立大学の学生と教官が一堂に集まり、寝食を共にしながら研修することによって、学生と教官並びに大学間の交流を深め、かつ、同一テーマについて多面的に授業をすすめることを目的とする。
2. メインテーマ 「九州・沖縄の自画像 ―過去・現在・未来―」
3. 主管校 九州大学大学教育研究センター
4. 当番校 琉球大学教養部
5. 会場 九州地区国立大学九重共同研修所
大分県玖珠郡九重町筋湯〈TEL. 09737-9-2617〉
6. 開催期間 平成6年7月9日(土)～7月13日(水)の4泊5日
7. 参加資格 九州地区国立大学に在籍する学生(教養部を置く大学は、教養部学生)で当該大学が指定する者

8. 募集人員

福岡教育大学	3人
九州大学	12人
九州芸術工科大学	5人
九州工業大学	5人
佐賀大学	10人
長崎大学	10人
熊本大学	10人
大分大学	6人
宮崎大学	6人
鹿児島大学	10人
琉球大学	12人
鹿屋体育大学	4人
合計	93人

9. 日程 別紙日程表のとおり
10. 講義・フォーラム題目等及び講師

○ 講義

1. 「自己像(セルフイメージ)について」 佐賀大学教授 池田 行伸
2. 「若者と自動車文化」 大分大学講師 平井 敏彦

3. 「九州の地域おこしと青年活動」 長崎大学教授 猪山 勝利
 4. 「歴史と国際化およびアイデンティティ」 九州工業大学助教授 長谷 安朗
 5. 「音と言葉・音楽と文学 ―現代沖縄若者文化考―」

琉球大学助教授 大胡 太郎

○ 特別講義

「国際交流の原点」

鹿児島大学教授 志賀 美英

○ フォーラム

「九州・沖縄の若者と文化」

コメンテーター：琉球大学教授 山里 純一
 及び上記各講義の担当教官全員

司会者：琉球大学 学生

九州大学講師 山本 教人

○ 登山指導

11. 参加申し込み

- (1) 参加希望者は、当該大学の担当係へ参加費を添えて申し込むこと。

ただし、既納の参加費は原則として払い戻しをしない。

- (2) 当該大学は、参加学生名簿及び教職員滞在計画書を5月27日（金）までに当番大学あてに送付すること。

- (3) 参加費は、大学ごとに一括して第1日目に会場で払い込むこと。

12. 参加費（食事及び雑費）

10,000円【7月9日（土）夕食から7月13日（水）昼食まで】

13. 単位の認定

当該大学の授業の一部と見なされるが、単位を認定するか否かは、各大学の判断において行う。

ただし、認定することのできる単位数は、2単位までとする。

14. その他

- (1) 持参品 筆記用具、ノート、洗面用具、着替え類、パジャマ、登山靴又は底が厚く溝のある運動靴（但し、履きなれた物）、長袖、長ズボン又はGパン等、セーター、登山用帽子、水筒、手袋、雨具（折りたたみ傘とポンチョ又はビニールカップ）、健康保険証（コピー）、日常使いなれた薬など。

- (2) 集合 参加者は、各大学ごとにまとめて、7月9日（土）午後3時までに会場に集合すること。

- (3) 解散 7月13日（水）午後1時頃に現地で解散するが、参加者は借り上げのバス及び船舶で各大学まで輸送する。

第19回九州地区国立大学間合宿共同授業 日程表

平成6年度

時間	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23									
月日	7月9日(土)	7月10日(日)	7月11日(月)	7月12日(火)	7月13日(水)	7月14日(木)	7月15日(金)	7月16日(土)	7月17日(日)	7月18日(月)	7月19日(火)	7月20日(水)	7月21日(木)	7月22日(金)	7月23日(土)	7月24日(日)	7月25日(月)									
第一日目	車中オリエンテーション																									
第二日目	起 床	朝 食	講義(2) 「若者と自動車文化」 大分大 教官 平井 教官	休 息	講義(3) 「九州の地域おこしと青年活動」 長崎大 教官 猪山 教官	昼 食	特別講義 「国際交流の原点」 鹿児島大 教官 志賀 教官	休 息	自由時間 教官等 打合せ 付会	施設見学 (地熱発電所の見学)	自由時間 教官等 打合せ 会	夕食	講義(1)~(3) についての 討議I	自由時間 教官等 打合せ 会	夕食	講義(1) 「自己像(セルフイメージ)について」 佐賀大 教官 池田 教官	夕食	交歓 会	自由討議 (レポート 作成を含む)	自由時間	消灯・就寝					
第三日目	起 床	朝 食	講義(4) 「歴史と国際化およびアイデンティティ」 九州大 教官 長谷 教官	休 息	講義(5) 「言と言葉・音楽と文学」 琉球大 教官 大胡 教官	昼 食	フオーラム 「九州・沖縄の若者と文化」 琉球大 山里 教官 及び各講義の担当教官 琉球大学の学生	自由時間 教官等 打合せ 会	自由時間 教官等 打合せ 会	自由時間 教官等 打合せ 会	自由時間 教官等 打合せ 会	夕食	特別講義及び講義(4)・(5)についての討議II	自由時間 教官等 打合せ 会	夕食	登山指 導	自由討議 (レポート 作成 含む)	自由時間	自由時間	自由時間	消灯・就寝					
第四日目	起 床	朝 食	登山(スポーツ) 九州大 山本 教官														自由討議	自由時間 教官等 打合せ 会	夕食	懇 親 会	自由時間	自由時間	消灯・就寝			
第五日目	起 床	清 掃	朝 食	全体討議 (感想文等作成)														閉 講 式	昼 食 弁 当 散	自由討議	自由時間 教官等 打合せ 会	夕食	懇 親 会	自由時間	自由時間	消灯・就寝
月日	7月	8月	9月	10月	11月	12月	13月	14月	15月	16月	17月	18月	19月	20月	21月	22月	23月									
時間																										

Ⅲ. 第19回九州地区国立大学間合宿共同授業講義要旨

(1) 「自己像（セルフイメージ）について」

池田 行伸（佐賀大学教授）

生まれてから16ヶ月くらいまでの乳児は、まだ自己と他者の区別がつかない。それゆえ、親と自分の区別さえついていない。発達するにしたがって、客観世界の対象と自分で観察できる自己との区別がつくようになる。前者を対象表象、後者を自己表象（自己像）とよぶ。自己表象ができあがってゆく過程では、環境からさまざまな影響を受ける。特に青年期は自我が確立する時期であり、自己表象形成過程では非常に重要な時期である。エリクソンは、この時期を青年期モラトリアムとよび、自我同一性確立のために青年自らさまざまな価値を追い求め、それらの中から自己に合う価値を取り込むのだと説明した。ユンクは、さまざまなタイプの人が別のタイプの人と出会ったり、別なタイプの内なる声を聴き、それらを取り入れることによって、個性化が行われるという。このような過程はまた、自己実現の過程ともいわれる。このような例を引用しながら、人が自分自身であることを認識してゆく心の過程を説明する。また、その失敗例として、ある種の精神疾患についても触れる。そして、自分とは何かという、自己イメージについて考えてもらうことにする。

(2) 「若者と自動車文化」

平井 敏彦（大分大学講師）

産業革命以来、いろいろな産業活動の結果、人々はより多くの機械文明の恩恵に浴する事にはなった、反面、資源の問題、リサイクルやPL（製造物責任）や特許権等のモノを生産する過程での諸問題、また環境問題さらには対外貿易不均衡による国際的経済摩擦の様な多くのマイナスの要因を作り出してしまった。

現代の機械文明の代表としての自動車を取り上げ、あるクルマの開発哲学から商品コンセプトを創って行くプロセスの中で、機械は人類を便利にさせる**機械文明**にとどまる事なく、人々に喜びや幸せをもたらす**機械文化**でなければならない・・・自動車も単なる交通の道具にとどまる事なく、人々に感動と喜びをもたらす**自動車文化**を持たなければならない・・・と言う**自動車文化論**を展開する。

21世紀に向けて、全ての日本製品は我国の製品としてのアイデンティティを持ち、日本の文化の香り高いモノであって欲しいと思う。そのような日本製品は感性和個性豊かな若者達によって創られる。

(3) 「九州の地域おこしと青年活動」

猪 山 勝 利 (長崎大学教授)

はじめに

地域おこしの源流としての九州

地域おこしと青年

1. 地域おこしの意義と基本要素

1) 地域危機への対応と地域自治の創造

2) 地域おこしの基本要素

① 産 業

② 文 化

③ コミュニケーション・組織

④ 人 材

2. 典型的な地域おこしと青年

1) 大分県大山町、福岡県矢部村

産業、福祉、文化、交流のアンサンブル

2) 大分県湯布院町

環境、産業、文化のネットワーク

3) 宮崎県綾町、熊本県小国町

環境、産業、文化のネットワーク

4) 佐賀県佐賀市

環境、文化の交流ネットワーク

5) 長崎県佐世保市

環境、文化、生涯学習のネットワーク

(4) 「歴史と国際化およびアイデンティティ」

——北九州市を中心とする「強制連行の足跡を若者と辿る旅」の活動とイギリスにおけるアジア系移民の比較——

長谷安朗（九州工業大学助教授）

北九州市の市民グループを中心に、過去4回にわたり毎年「強制連行の足跡を若者と辿る旅」が行われてきた。この旅は、関釜フェリーで下関を出発し、韓国、九州の強制連行の歴史を学ぶ旅で、韓国では、抗日民族運動の発祥地のソウルのパゴタ公園、日本の植民地支配の生々しい歴史を保存する独立記念館、現実に強制連行された人による歴史の証言などに会う旅である。そして、かつての強制連行の地である九州では、筑豊、大牟田の炭坑、長崎の高島炭坑などを訪れる。参加者のほとんどは日本の中高生たちであり、これまで数冊にわたって刊行されてきた文集から彼らの思いを伝えたい。他方、ヨーロッパにおいても、移民グループの中で、若者たちの新しい運動が次々と起きている。そのうち特にイギリスのアジア系移民（インド、パキスタン、バングラデシュ出身者）の運動とアイデンティティのありかたを紹介し、比較を試みたい。

(5) 「音と言葉・音楽と文学」

——現代沖縄若者文化考——

大胡太郎（琉球大学助教授）

若者文化というものが、かっても現在も、時代状況を敏感に反映したものだとするなら、現代の若者文化はどのようなものか。

民俗学で「常民」と呼ばれる、かつての民衆の〈声なき声〉であったようなものではなく、近代社会において人々は〈大衆〉として発見され、消費社会の中でメディアに積極的にかかわり、メディア自体を活動の場とする〈メディア文化〉と呼ぶことができるものが現代の若者文化のきわだった特徴と言えよう。

〈メディアの中の声〉としての若者文化を考えるのにミニコミ誌・同人誌がまず挙げられる。（投書・アンケート・マンガ・小説・パロディ・やおいなど）音楽においても、一時期のTV番組“イカ天”で頂点に達したバンドブームの頃とは異なった、現在のオリジナル曲を発表する〈場〉の、しかも沖縄特有のバンドのあり方が注目されよう。（沖縄にはホコ天に当たるアマチュアバンドのスト

リートがない。一応、パレット久茂地と三越前があるにはあるが、エレキのフルバンドではない。)この点を手掛かりに近年のアコースティック→アンプラグドのブームにも言及したい。

オリジナルの曲や文体(パロディもやおいもある意味でオリジナリティーの追求だ)で自分たちの〈声〉を発信し続ける現代の若者文化の特徴はどのようなものだろうか。20~15年前にやはり同人誌やバンド活動を通して自分の声を誰かに届けようとしていた私自身の体験と比較したり、現在、実際に活動している若者たちの主張を聞いたりしながら考えてみたい。

特別講義 「国際交流の原点」

志賀美英(鹿児島大学教授)

これまでの日本の国際交流は、モノ・カネ中心の硬いものが主流であって、市民レベルでの柔らかい交流、例えば文化交流のようなものはあまり盛んでなかった。経済的に対外依存度の高い日本にとって諸外国との信頼関係はますます重要な課題になってきているが、信頼関係の樹立にはヒトとヒトとの柔らかい交流が不可欠だと思われる。

ヒトとヒトとの交流を成立させるには、「相手を理解すること」と「自分を理解させること」の2つが等しく必要である。これまでの日本人の国際交流は、前者に力点が置かれ、後者がおろそかになっていたように思われる。今後は、国際交流をより実りあるものにするために、後者に力点を置いた交流が求められよう。

相手に対して自分を理解させるには、何よりも「自分を知ること」が先決であり、このことが、これからの日本の国際交流の原点であると思われる。従って、その第一歩は、自分の国や自分の地域の文化・自然環境・社会事情等を客観的視点から見直すこと、言い換えれば、足元の再確認にほかならない。まず、自分を育んだ文化や自然に関心を持ち、それらを大事に思う気持ちが必要だ。

フォーラム 「九州・沖縄の若者と文化」

コメンテーター 山 里 純 一（琉球大学教授）
及び各講義担当教官

司 会 者 琉球大学学生

今回のフォーラムは、教官の基調報告に基づいて、教官の発表及びそれに対する学生の質疑応答を行うという従来のフォーラム形式を基本的に改め、次の方法で行う。

1. 始めに約3分間程度（1,000字程度）の報告をその大学の学生代表が行った後、全体で質疑応答・討論を行う方式をとる。各講義担当教官は、コメンテーターとして出席し、学生の質問等に対して助言・指導を行う。（各講義担当教官は、フォーラムの内容に深く関連したメインテーマ「九州・沖縄の自画像—過去・現在・未来—」の観点から、おのおのの意見をもって、ディスカッションに加わることが望ましい。）
2. 各大学から提出されたレポートを事前にコメンテーターの教官（琉大教官及び各講義担当教官）に配布しておく。その際、コメンテーターは、あくまで学生主体のフォーラムをスムーズに進行させるために発言をする役割であり、なるだけ学生の自主的な運営を妨げないよう注意する。

「登山指導」

—登山時の服装と携行品—

山本 教人（九州大学講師）

1. 服装について

- 帽子
 - 長袖のシャツ セーター、ヤッケを必ず持つていくこと。
 - アンダーシャツ 下着、又はTシャツ
 - 長ズボン Gパンでよい。
 - 靴下 特に厚いものは必要ない。
 - 靴 スニーカーでよい。
但し、①履き慣れたもの
②底に溝があって滑りにくいもの
③穴が開いたり破れたりしていないもの
- 本格的な登山靴は必要ないが、キャラバンシューズのような軽登山靴が軽くて、底が硬いので楽であろう。

2. 携行品について

- セーター 気温が低いことがあるので。
- ヤッケ ウインドブレーカーでもよい。
- 雨具 レインコート、カッパ、ポンチョのいずれか（ヤッケ等が防水されていればそれで代用できる）
折たたみ傘
- 手袋 軍手でよい。
- タオル 2枚 汗拭き用と予備
- ザック ナップザックかデイパック（携行品を入れ、背負えるもの）
- ビニール袋 着替えや濡らしたくない物を入れていったり、ゴミ等を入れて持って帰る。
大きなものが2～3枚あるとよい。
- 水 水筒やスクイズボトルなどの蓋ができてこぼれない物に入れること。
- 弁当 合宿所で準備してくれる。
- 非常食 キャラメル、チョコレート、ビスケット（おやつを兼ねる）
- 持病薬

◎ 上記の服装と携行品は、必ず準備すること。

晴れば日差しが強いことや曇りや雨だと気温がかなり下がること、および滑りやすいことなどを念頭において、準備しておくこと。

第19回九州地区国立大学間合宿共同授業

講義担当講師の推薦参考図書一覧

(事前に入手し、目を通しておくことが望ましい)

教官名	参 考 書 名 (著 者 名)	出版社名	発 行	価 格
池 田 行 伸	ユング心理学入門 (河合隼雄 著)	培 風 館 初版発行	1967年 (1993年版)	1,262円
平 井 敏 彦	武 士 道 (新渡戸稲造 著)	三 笠 書 房	1993年	1,100円
	(原書) Bushido (Inazo Nitobe) (注)生協又は丸善にて購入可	CHARLES E. TUTTLE Co./ JPN	1898年	1,000円
猪 山 勝 利	まちづくりの思想 (本間義人 著)	有斐閣選書171	1994年	2,575円
長 谷 安 朗	バンングラデシュの海外出稼ぎ労働者 (長谷安朗、三宅博之 編)	明 石 書 店	1993年	2,575円
大 胡 太 郎	少女民俗学 (大塚英志 著)	光 文 社	1989年	770円
志 賀 美 英	特になし			
山 里 純 一	特になし			

IV. 第19回合宿共同授業を終えて

1. オーガナイザーの感想

第19回大学間合宿共同授業を終えて

オーガナイザー 宮 城 雄 清 (琉球大学)

<メインテーマ、フォーラムテーマの設定>

九州地区国立大学間合宿共同授業という他に類例をみない教養教育のモデル事業としての本教育プログラムは、メインテーマをめぐる多面的アプローチによる講義・討議と大学間の交流をその目的としている。すなわち、メインテーマは本教育プログラムの展開における基本的なコンセプトとしてとらえられよう。従って、当番校としての本教育プログラムに関する企画運営は、メインテーマの設定から出発した。部内の総合科目委員会でメインテーマの設定について審議していただいた結果、「九州・沖縄の自画像—過去・現在・未来—」が浮び上ってきた。我国において、九州・沖縄は、テーマ性に富んだ有数の地域であり、人と環境との接点としての独特の歴史・文化が形成されてきた地域である。この事は、本教育プログラムの過去3年連続のメインテーマに「九州・沖縄の〇〇〇」として設定されてきた事からもうかがい知ることができる。今回はこれからの「〇〇〇」を「自画像」として包括的にとらえたまでである。九州・沖縄を生きる拠点としてきた人々が、自然が多種多様な色彩豊かに描いてきた九州・沖縄の自画像があり、現在そして未来にわたって描き続けられるであろう。そこに視点をおいたわけである。

もう一点は、本教育プログラムにおいて学生諸君に主役の場を与え、輝かせてみたいという想いから、フォーラムテーマとして「九州・沖縄の若者と文化」を設定し、その運営形態も学生の主体的運営を試みるということにした。大学間合宿共同授業における大学間の交流は、共同授業という趣旨以外に、参加大学の学生諸君に体験としての文化的接触の機会を与えるという意味で大変大きい教育的効果を持つからである。時代の変動期・転換期は人、とりわけ若者が輝く時であることは歴史が教えている。まさに今回のテーマは、異なる地域と学風を持つ諸大学で知的活動をする学生諸君が、彼等自身について討論することを意図したものであった。

このような観点から講義を企画したことにより、特にフォーラムとの関連性を重視した結果、文化論的指向の強い講義の組み合わせになった。

<合宿共同授業>

参加各大学にはその地域性、歴史、学風等々といった特色があるはずである。交換会、懇親会はそのような視点に立った大学間の紹介・交流が必要であると思う。

各講義はその内容と展開においてよく準備され、個性豊かで、教養の総合科目的性格をもつ講義にふさわしい水準と質を持っていたと思う。今回、講義運営に関して約15分から20分程の学生諸君の質疑・討論の時間を設定していただいた。各講義とも学生諸君はその時間を十分に利用して、積極的な質疑・討論をしてくれたし、学生のエネルギーを感じる事ができた事は今後に向けて大変意義があったと思っている。

昨年からプログラム化されてきた各講義に対する学生のレポート作成に関しては、真面目な態度が十分感じられた。多種多様な専門領域に属する他大学の教官から多角的視点に立った総合科目的講義を受講し、修学意欲を高めるべく、あえて共同生活を通じた授業という目的をもつ教育プログラムからすれば、学生のレポートは必然的なことだと思われる。やはり仕事にはまとめが必要であり、まとめるという過程で講義の深層部分を考察するチャンスに出逢い、その講義の意義をつかむことができるのではないかと思う。

フォーラムについては、そのテーマと運営に今一つの感が残った。「若者と文化」というテーマに関して、「文化」にこだわりすぎて、「若者」という学生自身の部分があまり語られていなかったような気がした。勿論、テーマそのものが学生にとって漠然とした課題になってしまった事にも大きく起因していた事は確かである。参加学生の大多数がわずか3か月間の大学生活の経験しか持たない1年生であり、大学生としての修学意識と人生のモデルとしての生き方のスタンスの不確定要素にも起因しているかもしれない。そのことは、フォーラムの主体的運営という新しい試みにも関連することである。それにしても、特定の学生諸君による意見・討論にその展開が終始した感もあったが、学生諸君の討論への積極的参加は、学生の豊かな可能性、個性、エネルギーを感じさせるには十分なものがあったと思う。

<久住登山>

どうも、琉大は晴男であるようである。平成元年の当番校の際は雨期であったにも拘わらず登山日は好天に恵まれ、今回は雨期も明け、真夏日の炎天下での登山になった。そこで脱水、日射病の新たな心配ごとが出てきたのである。炎天下での100余名の集団登山は無謀ともいえる厳しいプログラムの実行であったわけだが、見事、大過なく成功した。登山指導担当の山本先生（九大）のまさに適切で綿密なオリエンテーションと、当日の細心の配慮に基づいた登山ペースと完璧なまでの指導によって、そのような心配ごとは見事に克服されたのである。山本先生の熱意とご苦労に対し、誌面を借りて厚く御礼を申し上げる次第である。また、牧の戸峠まで2台の公用車で全員の弁当と飲物運び、

そして不慮の事態に備えて車にて待機、連絡調整をしていただいた主管校九大の空閑補佐、津山係官の心暖まるご配慮に心から感謝申し上げる次第である。

九重には、大自然のおりなす景観への感動、山頂を極めた時の快感、そして地熱発電における大自然のエネルギースケールに対する感動がある。九重は大自然の営む尊厳な教育効果を享受できるすばらしい環境である事を認識した参加者も多かったと思う。

<結びに>

最終日の全体討議は学生諸君の比較的活発な討論参加を得て有意義だった。アンケートの結果は80%の学生諸君が満足と回答し、不満の回答はゼロであった。したがって、今回の大学間合宿共同授業はあるべき水準に達していたと判断して良いだろう。

大学間の共同生活、共同授業による総合科目としての講義等のことを考えると、参加学生には大学生としてのスタンスの確率に至るある程度の期間の大学生活の経験が必要であることも感じられた。しかし、学生諸君が自覚に満ちた姿勢と他者に対する優しさを持ち、純粋なほどに生き生きとした知的好奇心に満ちている限り、九重における大学間合宿共同授業の前途には感動があり、希望があるだろう。

結びに、企画から実施に至るまで、当番校に対する深いご理解とご指導・ご鞭撻をいただきました主管校九州大学の前教養部長の押川先生、九州大学大学教育研究センター長の原田先生及び、教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。また、公私ともにご多忙中にも拘わらず講義担当を快諾され、学生諸君に感動の業を伝え、知的好奇心を高めていただいた講師の諸先生方に心から御礼申し上げます。学生引率、実施期間中の共同生活における学生指導及び運営上の提言、炎天下での登山班の引率指導等々のご苦勞をして下さいました参加各大学の教職員の方々に心から御礼申し上げます。また、準備の段階から実施期間中にわたって献身的なご苦勞をされた当番校琉大の平良係長、喜納係官を中心とした学務係の関係各位、教官各位に心から御礼申し上げる次第である。オーガナイザーの我儘を暖かく見守り、ご支援して下さいました彌益教養部長、金城事務長に心から感謝申し上げる次第である。

2. 参加教職員の感想

合宿共同授業に参加して

中 木 達 幸（福岡教育大学）

今回初めてこの合宿共同授業に参加する機会を得ました。自分の研究内容からも担当している授業内容からも性格が大きく異なるテーマでしたので、事前の学習会での参加学生への指導で戸惑うことが多く、不安を抱えての参加でした。しかし、実際に参加してみると、当番大学と主管大学のきめ細かい配慮のおかげで、楽しく過ごすことが出来ました。

各講義の最後約15分間を学生からの質問時間に充てることを本年度から採用したとのことですが、合宿授業全体の流れからみて、とても有効に働いたと思います。最初は特定の学生達の発言が目立ちましたが、オーガナイザーの適切な進行や学生間の相互啓発もあり、発言する学生が増え、十分満足出来るものであったと思われまます。特に、最終日の全体討論で発言した学生の数に驚異を感じたのは私だけでないと思います。基本的にこの路線を続けて下されれば、来年度以降に参加するであろう学生は非常に喜ぶのではないかという印象を強く持ちます。

私の学生時代の経験法則によれば「自由討論の時間とは遊びの時間の言い換え」です。しかし、この合宿授業では違っていました。中には休息を取っているものがいたようですが、多くの学生は、時間一杯まで机に向かい、ノートを見ながらレポートを書いていた。長年の経験に基づいたシステムだと思われまますが、長い日程の中で、めりはりをつける意味からも有効であると感じまます。

私自身、考えがまとまっていないのですが、メインテーマの設定に関して、何らかの検討をする必要があるかも分かりまません。今回はテーマにフィットした講義ばかりでしたが、関係者の多大な御苦労が感じられまます。ある決まったテーマでの講義は大変だと思われまます。もっと一般的なテーマの設定、あるいは、メインテーマの廃止なども検討する価値があるかも分かりまません。

最後に、今回は学生のみならず、私自身も多くの勉強をさせて頂きまました。雑用に追われる生活から離れ、美しい自然の中で、他分野の先生方、事務の方、他大学の学生と楽しく話しをすることも出来まました。興味深い講義を拝聴し、久住山の景色を堪能することも出来まました。当番大学と主管大学をはじめ皆様に深く感謝致しまます。

久方ぶりの久住山頂より

井上眞理（九州大学）

ヒグラシの鳴き声に迎えられて新生活が始まった。早朝からさめざめと畳につぶして泣く娘を残して、宿に電話はないからねと言っては出たものの心は既に苦渋合宿。「女は口が裂けても女であることを職場に持ってきてはいけない」が私の師の格言であるが、あのカナカナカナカナはどうも物悲しい。さて、今回のテーマは「九州・沖縄の自画像」で、広義の意味での文系の講義が中心で、それでもウーンと頭をひねってもでてこない。「そうだ！九重は野生ツツジの宝庫だから安易に「耐寒性の獲得」なんて場違いな話しか用意できず、結局は引率役を仰せつかってやってきた。九大のスタッフには登山経験の豊富な原田先生や、明日の食事をピタリと当てる津山氏を初めとしたベテラン揃いのおかげで、次第に俗世間の事を忘れていった。

ずいぶんと時間を割かれたのだらうと思われる用意周到な先生方の講義に応えるべく、参考図書だけでなく多くの本を借りて勉強してきた九大のS君も積極的な討議を盛り上げるよう気配りを忘れない。これは回りの学生達にも少しずつ手を挙げる「勇氣」を伝播したようだった。私自身は聴講生の身の上に、どんぶり飯に、炊事・洗濯・子供なしの生活を堪能することになった。エネルギー一定の法則が人体にも成り立つなら、たとえ4h睡眠の連夜であっても（廊下のバタバタで、なかなか寝つけないし、若い押川さんを頼る男子学生に突如明けられる恐怖感 etc）、日常の仕事と家事から解放された際にどちらのエネルギー消費量が大きかったかは久住登山をして、夜の懇親会までしっかり楽しんだことで明らかだった。

実は、久住は20代に登ったのが最後だったなあと思いを馳せ、ましてや雲一つない冴え渡る空。天は毎日見上げては、山本先生と「やっぱり、晴れますねー」と、思わず出る嘆息。彼は100余人の引率を思う重責からで、私のそれは私自身の比類なき耐暑性のなさに由来する。本来「何はなくとも健康だけが取柄」だが、外界から晴れ渡れるのに反比例して、私の胸には暗雲が垂れ込めていった。帽子、水筒、リュックなどなくても平気な学生達には、前夜、夏山がいかに危険かと山本先生の何本もさしたクギの効果で、廊下は昨晚とうって変わって山の家独特の静寂さを取り戻している。一方、班リーダーたる私が熱射病で倒れたら迷惑かけるしと悩みはつきず、安らかな2人の寝息を聞きながらまんじりともせず夜が更けた。

さあ、まだ見ぬ頂上目指して延々と炎天下の行軍が続く。久住の夏山登山がなぜ危険かということ、火山灰地特有の植生と山焼きで木陰がないのが大きな要因となっている。いよいよ心臓は動悸をうち始める。この暑さでへこたれそうになったとき、右に左にミヤマキリシマを初めマイヅルソウやなつ

かしい植物群が顔を出してきた。強い紫外線に適応する小さなイワカガミの赤い葉のいじらしいこと。空はあくまでも碧く、草木は負けずに照り返す。リーダーとして気が重そうで（大丈夫よ）とひそかに応援していたY君、教室での学習会で（そんなつまらなそうな顔しないで）と言いたくなったX君、今年初めて担当した講義で（そんなに見ないで）と思わず思ったHさん達、入学当初の固い表情が弾ける笑顔に変わった。こうして無理せずマイペースで大人になって、年に一度くらいは久住登山もまんざら悪くはないじゃないと思わずにはいられなかった。せっかく、心が伸び伸びする自然がすぐ傍らにあるのに、狭い食堂で不自由な姿勢の聴講より、器を大草原に替えて討論するのもまた良きかな。

——下山して——

義父の容態が悪いのが気懸りのまま合宿に参加したが、ついに登山翌日、解散日の朝に逝った父の許に行くこととなった。学生達の感想を聞けなかったのが心残りだったが、空閑氏と彌益先生（琉大）初め皆の好意があったればこそ、その日の飛行機にも間に合った。九州の学生達は互いに別れを惜んでいたであろうと思い、はからずも葬祭で高知の「文化」を体感した。若者達も私ほどの齢になったとき、このような伝統の文化を踏襲するのだろうか、自然環境は植物だけでなく各地方の気質をも支配しているのではないか、などと今回のフォーラムの討議を反響しながら余計なことを考えた。

——10日ぶりに荷物を紐解きながら——

宮城先生を「団長」とするチームプレーの良さ、手作りの砂糖テンブラ（Mr・ドーナッツより10倍美味しい）のせいもあるのでしょうか、そこはかとなく感じた沖縄独特の情の濃さや、細やかな配慮に改めて感心しお礼を申し上げます。一方で、当番校の負担の大きさを考えると、周りの私達にももう少し仕事の配分があってもよかったのでは、とも思いました。早朝から深夜までのコマネズミのような行動を大城さんを通して感じていましたから。その恩恵から私自身は、他大学の異分野の先生方や事務の方々とも時間を気にせずゆっくりと話すこともでき、目から鱗が落ちたような思いも幾度かしました。この機会を与えて頂いた押川元教養部長にも感謝しなければなりません。また、九大教養部時代は同じ建物の住人だった長井先生は名実ともに更にビッグになられていましたが、アキレス腱断裂をおしてにこやかに琉球舞踊を披露して下さいました。六本松の皆さんにも見せてあげたいほど素晴らしかったあの踊りに深い感謝と、お見舞いの気持ちを申し上げたいと思います。

合宿共同授業の感想

山 本 教 人 (九州大学)

先の約束となるとついつい軽々しく引き受けてしまい、約束の日が近づいてくるにつれて大変な苦勞をするというのが私の悪い癖だ。年の初めに、今回の共同授業の登山指導を担当してくれないだろうかとの話があった時も、まだまだ先のことだと思えば簡単なことのように思われ(なぜそうなるのかは、本人にもわからない)、極めて安易な気持ちで引き受けてしまった。もっとも、共同授業は毎年梅雨の時期に開催されており、雨により登山中止の可能性の方が高いという思い込みも確かにあった。実際ここ2～3年ほどは、登山らしい登山は行われていなかったのである。ところが今年の夏は連日の酷暑で、気象庁もいつが梅雨の時期であったのか明確にし得ないような異常気象であった。

登山当日の12日も朝から抜けるような青空で、出発時には既に気温30度を超えていたと思われる。標高1,100mの研修所から1,300m地点の牧ノ戸の休憩所まではアスファルトの道路で、下からの照り返しで体力を消耗してしまうことが心配であった。牧ノ戸では、体調の思わしくない2名が登山を断念しなければならなかった。まったく予想していなかったことなのだが、当日は団体の登山客が多く、牧ノ戸からの行程はかなりの時間的ロスが強いられた。最初の難関である標高1,500mの沓掛山山頂付近で、さらに1名がアクシデントにより牧ノ戸の休憩所まで引き返さざるを得なかった。沓掛山を過ぎるとしばらくは平坦な道が続くが、なにぶんにも日陰がないために頻繁に休憩を入れながら全体的の様子をチェックしていくことが重要であった。山頂目の避難小屋で昼食をとることにしたが、自分も含めて食事が喉を通らない。標高2,000m近いのに、仕事と割り切らなければとうていがまんできかないような暑さであった。このような悪条件にもめげず全員無事に山頂に到達することができ、感動を共有することができたことは、共同授業の思い出の一つとして今後も心の中に残り続けることであらう。

全5日のプログラムの内、7月10日の昼から12日の夕方までという時間的な制約の中での参加であり、他の教職員の方々に申し訳ないような気持ちであったが、とにかく自分の仕事を無事終えることができほっとしている。合宿共同授業のことについては、事前に詳しいことを知っていたわけではなかったが、昼の講義よりも「アフター・ダーク」の盛り上がりの方がすごいという感心できないような噂だけは耳にしていたため、登山前日の夜の過ごし方が非常に気になっていた。今回の成功は、学生自身の健康管理に対する自覚が高かったことをその原因として挙げることができよう。しかしながら、当番校である琉球大学の教職員の方々をはじめ、参加教職員の皆様方の献身的なご協力がなければ、決して満足のいく結果は得られなかったであろうことも間違いありません。皆様方のご協力に深く感謝いたします。

「何かが変わった第19回研修」をターニング・ポイントに

空 閑 龍 二 (九州大学)

今年の合宿共同授業は、琉球大学オーガナイザーと、それ支える琉大スタッフ並びに琉大学生諸君の、熱意に満ちた姿勢の成果であったように思います。

これまでの研修スタイルの枠を少しでも変えようと、早くから研修スタイルの工夫とプログラムの検討をされ、そのためには当番大学あげての取組となるように、学生諸君の熱心な企画参加を実現されるなど、圧倒されるような熱意を感じました。

九重での合宿期間は4泊5日ですが、琉球大学の参加者は鹿児島までの船旅に加え鹿児島からバスで九重までの遠征を含めると、全行程8泊9日の重労働になります。

このようなハードな要素に加え、当番大学としての責任と、研修の方向転換を意図して企画を進められたことに、あらためて敬意を払う次第です。

遠隔地から参加の大学が当番大学の場合は、さまざまなハンディを背負っての当番となり、その気苦労は並大抵ではなく、主管大学としても大変気掛かりとなります。

しかしながら一方で、琉球大学のひたむきなご努力の様子に、今までと違う何かが期待できる予感がし、大詰めの準備段階で、ある種の確信を持つことになりました。

その最たる成果は、ほぼ恒常の傾向にあった深夜に及ぶ夜更しの喧騒が、途切れたことでした。参加者の放逸を困難にする、柔らかな秘策が異変を起こしたのです。

大半の学生は、奔放な時間への誘惑を犠牲にして、秘策に耐えなければならず、そのことが異変を実現したようです。この秘策こそ、当番大学・琉大の切り札であり実に巧みな教育的配慮であったと思われるではありません。

少なくともこの異変は、参加者全員のスタミナを翌朝へ十分に繰り越し、あまつさえ以後にわたって体調の無用な消耗を避け、そして異常気象にも近い数年ぶりの炎天下の久住登山を、一人の落伍者もなく達成する大きな要因になったと信じています。

勿論、登山前夜における九大健康科学センター山本教官の、静かだが明瞭な語り口による、「曖昧な分別での登山は許せない」「事前に十分周知したはずの装備がない者への毅然とした指摘」そして「それらの者への明確な対策の指示」が、研修生の真面目な反省を呼び覚ました上での、快挙であったことはいうまでもありません。

この登山前夜における真面目な反省と対応の傾向は、一貫して今回の研修を通じて見られた見事な傾向であったと思います。

自然の中で汗することがどれほど苦しく、そして爽快さをもたらすものかを、身をもって体験出来た今年の研修生は、素晴らしい思い出と友人に巡り会ったと思います。

一緒に研修を支えていただいた各大学の先生とスタッフ及び学生諸君に、主管大学の裏方として心からお礼を申し上げます。

事前準備のご苦勞の外、10日近く九重の山中で奮闘された琉球大学スタッフの方々には、来年の第20回に向け従来のパターンを、明らかに転換する試みとして一つの前例を示されたご苦勞に、あらためて感謝を申し上げます。

今年の貴重な試行が、点として語り伝わるのではなく、今後への線となって継続されるように、更に工夫と努力を重ねていきたいと思ひます。

合宿共同授業に参加して

菊 地 和 夫（九州芸術工科大学）

私は、この共同合宿授業は引率だけの参加の身でありましたので、他大学の先生方のご講義も拝聴できるし、また、まだ登ったことのない久住山にも登れることが出来ると内心、秘かに期待しておりました。

しかし、その週のはじめのサッカー実技中に学生と衝突して肋骨を骨折してしまい、結局、骨折の身でありながら私が行くことになってしまいました。この事情を連絡上のミスから当番校であります琉球大学に予めお知らせできなかったことを、大変申し訳なく思っております。

ところで、今回、私は合宿共同授業を初めて体験することになりましたが、感じましたことをいくつか述べてみたいと思ひます。

まず、当番校である琉球大学のスムーズな運営に大変驚くと共に、これにいたるまでに琉球大学の諸先生方及び事務当局の方々の周到な準備にかけたであろう時間や労力を思うとき、輪番性の当番校に入っていない我が大学が毎回、ただ参加させて戴くだけで良いのであろうかという、単純な疑問がわきました。

教養部が置かれている大学を輪番性で当番校にしているようではありますが、6年に一回の割合で当番が回ってくるということは、実際、大変なことではなかいと思われまふ。九州大学をはじめとして、

教養部の改組が進んでいる現在、共同合宿授業の更なる発展のためには、6大学の輪番性という運営形態を模索する時期にきているのではないのでしょうか。

また、今回の講師の先生方は相当なる準備をなさって講義に臨まれていましたが、残念なことに、施設上の不備からか黒板やOHPなどによる講義が後方からは見ずらく、せっかくのご講義が十分に聞き手に伝わらないのではないかと危惧を感じました。このところ、合宿共同授業は九重で開催されているようです。しかし、以前には、いろいろな場所で開催されていたようですので、経費の点もあるのですが、講師の先生方のご講義が十分に聞き手である学生に届くような設備・施設のある場所での開催も含め検討すべきことかと思われました。

また、講師の先生方は教養部や一般教育に所属する先生方が担当なさっているようですが、楔形のカリキュラムなどを採用する増加や、また、一般と専門の垣根が近い将来、取り払われるであろうことなどを考えるときに、講師の先生を教養課程の先生に限定することなく、広く学内より求めるようにしてはどうでしょうか。

以上のような点を今後、検討していただき更に発展性のある共同合宿授業にして戴ければと思います。

最後になりますが、当番校の琉球大学、ならびに主管校であります九州大学の関係者各位のご努力にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

雑 感

長 谷 安 朗（九州工業大学）

事前に送られてきた過去2年間の合宿共同授業の報告書に目を通し、私はすでに講義をひきうけてしまったものの、暗澹たる気分になった。「学生たちの夜毎の深夜に及ぶ飲酒」そしてその結果「昼間の講義での居眠り」、それでも2単位を修得できるという不合理。マーカーで印をつけていくと1ページおきぐらいにそのような指摘がある。当番校、主管校の各教官、事務官の方々による周到な準備、100名を越す人々の世話を一手に引き受けることの大変さと比較して、学生サイドの成果が大学間の「交流」と2単位の成績であるならば、その成果はあまりにも少ないといわざるをえないし、19回におよぶ年月のなかでの形骸化の指摘もまぬがれないだろうと思っていた。

しかし、幸い、今年度は、違っていたようである。学生の態度や取組みは概して良かったように思う。学生のゲロ拭きはしたが、全体的に深夜の酒はそれほどではなかった。それは、ひとえに「合

宿」であるよりも「授業」であるという趣旨を徹底させた当番校琉球大学の先生方のご尽力のおかげである。今後もし是非堅持していただきたい方針である。また、昨年度から実施されている各講義に対するレポートによって、学生ひとりひとりが、授業の内容を再度自分の文章によって考える機会が与えられ、これが内容の深化につながったのではないか。さらには、講義に関する「討議」の時間が夜に1時間半設けられていたので、講義において十分に敷衍することのできなかった点も明らかにすることができ、有益だった。「九州・沖縄の自画像」というテーマ設定も良かった。ただ全講義や特別講義をひとつのテーマのもとに収める必要はないのではなからうか。九重の大自然のなかでの授業だから、授業の一つぐらいを自然観察に向けてもいいのではないだろうか。

私は「移民第2世代のアイデンティティ」というテーマで、イギリスのインド系移民2世と在日韓国朝鮮人3世のアイデンティティ構造の共通性に着目しつつ講義をおこなった。イギリスでは、2つの文化に立脚して、イギリス人でありかつまたインド人であるという新しい形のアイデンティティが若い移民第2世代の間に生まれている。また、日本においても、通名を捨て韓国名を名乗り韓国人のアイデンティティを保ちつつも日本を永住の地であり故郷であるとする在日3世の生き方が共感をもって語られるようになってきている。比較は単純ではないが、論文などではなかなか書けないような実験的な試みができるのではないかと考えこのテーマを選んだのであった。このことに関して学生からの反応を記しておきたい。

レポートによれば、大部分の学生が、有益だったと答えていた。「この講義は自分にとってとても意味のあるものだった」(九大男子)。「この合宿後の夏休みを利用して自分なりに勉強し考えを出したいと思う」(九大男子)。「今私たちがすべきことは、まず“知る”ことであろう」(九大女子)。「今まで在日朝鮮人について考えたことは一度もなかった。今日ここでこのようなことについて考える機会を与えられたことにまず感謝したい」(佐賀大女子)。「これからは国際化は避けて通れない道であるが、その中でしっかりと生きて行かねばならない」(長崎大男子)。「講義前に配布されていたプリントで在日朝鮮韓国人の話を読み、とても考えさせられた」(熊本大男子)。「この合宿に来たのも、自分が大学で何を勉強すればよいかずっと悩んでいたもので、色々な講義を聞き、何かのきっかけになればと思っていたからである。私はまず日本や世界の実情を知らなければならぬといつくづく思い知らされた」(熊本大女子)。「日本の今の教育で、過去に日本が犯した罪はもっと後世に伝える義務があると思う」(熊本大女子)。「第2次大戦における強制連行の目的地が九州だったというのはショックだった」(宮崎大男子)。「朝鮮人でも日本人でもなくて在日2世だという言葉が印象に深く残った」(琉球大女子)。「無責任主義が日本人のなかにあり、ことなかれ主義がこの問題の根底を流れている。これから私たちがこの問題を真剣に考えて解決していかなければいけないと思う」(琉球大女子)。「日本にもイギリスのような人種関係法や多文化教育を導入するといいい」(琉球大男子)。

また、帰国子女や留学生は自らの体験も語ってくれた。「小中学校をブラジルで過ごしたが、日系のブラジル人たちを素晴らしいと思った。彼らはふたつの文化の両方の目で見る事が出来る。つまり視野がとても広いのです」(熊本大女子)。「私は8年前親の仕事の関係で中国から来日した。インド系2世や在日3世の自分はいったい何だろうという悩みに、私も時々そういう状態に陥る。日本をはじめとする移民を受け入れている国々は、まず現状、そして彼らの訴えを知らなければいけないと痛感します」(熊本大女子)。

しかし、つぎのような感想文も2編あったことも、書き落とすことはできない。「朝鮮の人の逆差別には反感を感じる。ひどい目にあったことなんて早く忘れてしまったほうがいいではないか。「日本人を恨め」なんて教育は、楽しい日韓関係につながらない。同和教育なんかでも思うが、差別してはいけませんよと教えることは、知らなくてもいい差別を教えることになっているのではないか」(鹿児島大男子)。いわゆる「寝た子を起こすな」論であるが、この学生の文章には韓国人に対する差別感も認められる。この学生は工学部の学生である。最近、タカ派の閣僚が相次いで、南京大虐殺はなかったとか、日本は侵略戦争をしたのではない、といった妄言ゆえに大臣の職を辞したが、こういった発言が若い世代に与える影響が心配である。

九重合宿共同授業を終えて

池田行伸(佐賀大学)

夏休みに入ってからの丸5日間、九重の共同合宿所に缶詰になることは、実験動物を飼育し、夏休みが書き入れ時の動物実験を行っている私にとっては、何となく気重なものであった。おまけに往路、渋滞に巻き込まれ合宿所に着く頃には十分ホームシックに罹っていた。しかし、酷暑の下界とは比べものにならないすがすがしい九重の空気に触れると、少し気分がなごんだ。とりあえず、初日、第一回の講義を行きさえすればよいのだと自分に言い聞かせ、最初の講義に臨んだ。開講直後の講義は、往路のバスの中でたっぷり寝てきたせいであろう、学生は大学の講義よりもはるかに真面目に聴講していたように思えた。私は、キッチリ送りバントを決めたバッターのように、十分な満足感を持ってベンチへ引き返したのである。だが、私が満足感にひたれたのは最初の日だけであった。二日目の平井先生、猪山先生の講義を聞いて、私がなんと愚かなことをしたのかに気づかされた。平井先生は、ご自身が手がけられたスポーツカー「ロードスター」のコンセプトについて語られたが、その自信に充ちた語り口はあの車の人気からきたのであろう。猪山先生は、各地の村おこし、とりわけご自身が

係わっておられる村おこしの現状を熱っぽく、ほとんど吠えるように学生に語られた。その次の特別講義の志賀先生も、国際交流に関するわれわれ自身の心構えの問題に係わる話であった。三日目の長谷先生は移民第2、第3世代のアイデンティティについて語られたが、「韓国では先の戦争時の日本人の虐待を大げさに語り過ぎているのではないか」というような主旨の学生の質問に、それまでの冷静な語り口が一変したのが心に残っている。最後の大胡先生は、長髪で元ロックバンドを組んでいたというユニークな先生だったが、講義の中で琉球の蛇皮線を弾いてみせた。あまりにもかっこよすぎるのではないか。とにかくこれらの先生方は、自分が今行っていること、考えていることを具体的な形で学生に訴えかけられた。私は教師としての習性で傍観者的に講義しただけだった。最後の方に回してもらってればもう少し変えられたのにと思っても、後の祭であった。

最後の全体討議も印象に残るものがあった。それぞれの学生が意見や感想を述べ合った。質疑、討議の時には必ず発言する常連も多かったが、最後に初めて勇気を出して発言した者もいた。一人一人の言葉には五日間の感動が込められているように思えた。そのような中、一人の学生が言葉では言い表せないからといって、ハーモニカを吹いた。目頭を押さえる者もいた。その後、一人の学生が立って、「これは19回目ですね。19回続いていて……、いつも同じことが繰り返されていて、何かちょっと違うと思う……。」とたどたどしく述べた。本人もうまく表現できなかったようである。つまり、こんな感動が、毎年夏、九重のここで19回も繰り返されているのだ。そしてそれは、教職員の手によって準備されたものなのだ。ちょっと変じゃないか、素直に感動できないのじゃないか。私にはそのように聞こえた。素直に感動した学生も素晴らしいし、ちょっと変だと感じた学生も素晴らしいと思った。どちらも次は学生自身でこのような感動を見つけ、自分のものにしていけばよいのだから。

五日間は思ったより速く過ぎた。この合宿は何かを学生に教えるのではなく、教職員の生き方を学生にぶつける場なのだということがよく分かった。そしてそれに学生がよく反応していた。暑い日はクーラーの効いた部屋で、テレビや漫画を見て過ごすほうがよいという学生より、日焼けと紅潮で顔を真っ赤にして久住山から下りてきた学生を見るほうが素晴らしいと思う。この合宿授業は、このような気持ちを抱く大学の教職員のロマンなのかもしれない。この夢を現実のものとしてくれた、当番校の琉球大、主管校の九大の皆様へ深く感謝したい。そして、学生に対する大学教職員の夢を実現する場を長く続けて行きたいと思う。

合宿共同授業雑感

久永義裕（佐賀大学）

合宿共同授業に参加するのは2回目である。最初は第9回の島原分校の授業であったが、懐かしく思い出される。同僚の先生と空き時間を見つけてはテニスに興じたこと、雲仙普賢岳に登山したことである。あの普賢神社の鳥居が爆発で折れ曲がって逆さになっているのをテレビのニュースを見たとき信じられない気持ちで一杯だった。万年雪のあった洞窟も、きれいな沼も、全て溶岩で埋め尽くされてしまったのだろうか。当時は、飲酒がひどく2日酔いの為午前中ベットの中で過ごす学生も何人かいました。

今回は、来年度の当番大学ということで、教養部の教務委員の私に出席が回ってきた。当時も、雨が全く降らず日本列島が猛暑の真っ只中。

私は2泊3日の参加だったが、マツダのロードスター（スポーツカー）を研究・開発に携われた先生やユニークな先生方の講義、久しぶりに専門外の勉強をさせて戴きました。

今回の合宿授業に関して感じたことを二、三挙げてみる。

1. 講義する教官は大学によっては臨番制のため、統一テーマと本人の研究が噛み合わないことがある。
2. ここ研修所も老朽化が進み、危険な個所や不便なところも多々あり、早急に改善・修理が必要と思われる。維持経費の不足が言われているが、各大学が少しずつ負担し、施設整備及び教育機器等の充実に努めてほしいものである。
3. 講義の行なわれている食堂に100人余りを詰め込むのは狭すぎる。

等である。

とは言え、講義を担当された講師の先生方の熱のこもった講義、主管校九州大学、当番大学である琉球大学の先生をはじめ事務官の方々の、早朝から深夜におよぶお世話に頭の下がる思いと共に、来年度の当番大学の責任の重さを感じました。

（琉球大学からお持ち戴いた手づくりケーキ美味しかったですね。有難うございました。）

第19回九州地区国立大学間合宿共同授業に参加して

猪山 勝利 (長崎大学)

はじめに

合宿共同授業への私の参加は、一年前から決まっていた11日からの集中講義のため前半の2日のみで『非常勤講師』の型の参加であり、一泊1講義の参加になった。提出していただいた学生のレポートを熟読しているうちに、一泊止まりで帰らざるをえなかったことを申し訳ないという気持ちと残念だったという思いで一杯になった。お詫びの意を込めて、参加感想を記します。

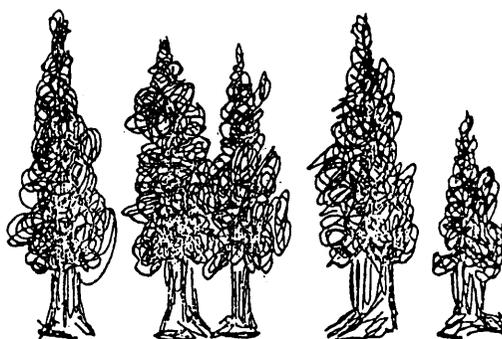
講義について

1 講義時間という制約と九州各地の地域実践に関わる者としての惟いが輻輳して、私の講義は力の入れ過ぎだったと反省している。しかし、講義後の質問やレポートから、学生たちの真摯な反応が感じられ、教官としてとても清々しい思いを感じた。

「新しい時代に向かっていると思った」、「将来九州の地域づくりに参画したい」、「自分らしさを生かした地域おこしの可能性を探っていききたい」などの学生の感想を読んでいるうちに、新しい文化形式で真っ正面から問題を提起すれば、現代の学生は無気力どころか、大きなパワーを秘めていると感得できた。

『非常勤講師』型参加者が提起するのは忸怩たるものがあるが、基本講義と特定課題のゼミナールが並行すれば、もっと学生の問題意識は深まるのだからと感じた。できれば、後期も開催して、前記の課題をゼミナール形式で深めることも今後の課題であろう。さらに、特別講師として、各地域の学生より少し先輩の若い活動実践家を招聘できれば、学生の社会意識ももっと深まっていくと思う。

最後に、当番大学の琉球大学の方々と主管校の九州大学の方々の深い心くばりのある運営と進行に感謝いたします。



第19回九州地区国立大学間合宿共同授業を振り返って

上江田 一 雄（長崎大学）

I. はじめに

今年の夏も九州・沖縄の各国立大学から集った学生・教職員と筋湯の地で寝食を共にすることになった。私にとって今回の合宿共同授業は、3年前及び2年前に続いて3回目であった。一昨年の報告書の中で、私は「思い出の多い5日間を振り返って思うことは、また機会があれば喜んで参加したいということである」と書いたが、まさか今年も参加するとは思わなかった。筋湯に来ると、かつての学生時代のことが偲ばれて、心身とも青春に戻った気になる。それ故、今年度になって、当教養部で合宿共同授業の引率者の件が私の方に来たときは、私はそれを喜んで引き受けた。本学の全学教育実施調整委員会の総合科目専門委員会委員長としての立場もあったが。

今年の合宿共同授業も無事終了し、学生・教職員はそれぞれの大学に戻っていった。合宿共同授業が、今後、益々活発になることを願って、以下の項目では私が気付いた点を記したい。

II. 合宿共同授業について

(1) メインテーマについて

今年のメインテーマは、「九州・沖縄の自画像—過去・現在・未来—」であった。ややもすると総花的になりがちな難しいテーマであったが、当番校及び各講師の工夫がみられた。ただ学生にはテーマが大きすぎて戸惑いもあったと思うが、その点はフォーラム「九州・沖縄の若者と文化」のセッションでカバーできたと思う。

(2) 授業の形態について

講義の中に質問・議論の時間を設けたことは、講師及び学生の双方にとって良いことだ。質問・議論を通して双方が学ぶという姿勢が大事だと思っている。当番校の配慮に感謝したい。それから施設見学をスケジュールに入れた点も評価したい。

(3) フォーラムの在り方について

学生主体によるフォーラムは、新しい試みだったが、大変良かったと思っている。自らが考え、お互い討論して主題を深めていく姿勢が今の学生には求められていると思う。特定の学生のみの発言等の問題点もあったが、今回のフォーラムの形態が、今後も定着することを希望する。

(4) 登山について

今年は梅雨明けが7月上旬になり、まれにみる連日の晴天だった。3年前は雷雨の中を牧ノ戸峠までの行進だった。2年前はガスが発生したため、くつかけ山までだった。今年は三度目の正直で、と

うとう久住山の山頂に着いた。私にとって感慨もひとしおだった。炎天下の厳しい登山だったが、一人の病人も出さずに下山した。苦楽を共にするとお互いの心の壁が取り除かれる。なんと素晴らしいことではないか。

Ⅲ. 合宿生活について

(1) 学生による運営について

一昨年も書いたことだが、合宿生活の運営を、ある程度学生に任せたらどうだろうか。夕食前に開かれる「教官打ち合わせ会」と平行して、各大学の学生世話人による「学生世話人打ち合わせ会」を設けて、合宿生活の在り方および運営について学生自身による打ち合わせがあってもよいのではないか。日常の自主的な運営があつてこそ、飲酒に関しても学生は責任ある行動の必要性を考えるとと思うが。

(2) 夜間の巡回について

今回は教職員のみによる巡回だったが、学生も交えての巡回の方が好ましいのではないか。学生と教職員が協力して合宿生活を運営するという考えが必要ではないかと思う。

Ⅳ. おわりに

気付いた点を幾つか書いたが、振り返ってみると長いようで短かった5日間であった。報告を書きながら、筋湯で寝食を共にしたさまざまな人々の顔が浮かんでくる。講師の方々のそれぞれの持ち味を生かした講義が印象に残っている。さらに、学生達の明るさが思い出される。思い出の多い5日間を振り返って今回も思うことは、また機会があれば喜んで参加したいということである。ところで、北部九州は合宿共同授業が終わっても8月25日現在ほとんど雨らしい雨が降らず、水不足で生活が脅かされている。当時の連日の晴天は合宿共同授業にとって好都合だったが、今は切に雨が待たれる。最後に、当番校の琉球大学教養部に感謝したい。ご苦労様でした。

「第19回九州地区国立大学間合宿共同授業」に 引率・参加して

長谷義隆（熊本大学）

合宿共同授業始めの「教官等打ち合わせ会」で「単なる引率教官として参りました」と自己紹介した私には、それとは裏腹に一つの決意があった。それは自然科学分野（地質学）を専門にしている私には、今回の共同授業のメインテーマ「九州・沖縄の自画像―過去・現在・未来―」、フォーラム「九州・沖縄の若者と文化」は、研究上全く無縁のものであるように思えるけれども、このように研究上縁のない分野を学生と一緒に学ぶよい機会だと考え、すべての講義を漏れなく聴き、特にできるだけ詳細にノートを取ろうという意気込みであった。これには、日頃学生諸君のノートの取り方に不満もっている自分が、学生の立場に立って、自分の満足するようなノートの取り方ができるかどうかを確かめてみたかったためでもあった。

佐賀大学池田行伸先生の講義(1)「自己像（セルフイメージ）について」では人の成長に伴う自我意識の発達過程と自我の障害が取り上げられ、青年期における自己の形成を「青年期モラトリアム（心理社会的猶予期間）」との絡みで考察し、“自己実現”が色々なタイプの人と会話し、他者を理解でき、自分の内的な部分を発芽させて人格をつくりあげる、すなわち、自己像をつくりあげることだとの内容であった。そして、九州・沖縄の中で自分をどのようにつくり上げるかを考えることが重要であるとのコメントであった。講義(1)についての討議 I では、星占いや血液型、性格は生まれつきか環境か、夫婦別姓の問題などについて、学生間で活発な議論が展開した。この講義と討議を通して、私には、討議の中でも出てきたように、「自己実現」には年齢はなく、今後も自己実現を求めて歩んでいかなければとの思いで満たされた時間であった。

大分大学平井敏彦先生の講義(2)「若者と自動車文化」では平井先生のマツダ株式会社での32年間の車づくり一筋、それは単にメカだけの問題ではなく、そこに哲学や文学を組み入れた車づくりへの姿勢が語られた。特にマツダの小型スポーツカー J58G について、なぜ常識を破る構造を取り入れたかの説明が明快に語られ、人と車とのコミュニケーションが馬の息づかいやひずめの音を感じる“人馬一体”の考え方でなければならないこと、また、自動車文明（車を便利に利用する）ではなく、自動車文化（自動車をひっくるめて、人・環境を考えていくべきものという意味）なのだということを学生の心に訴える語り口で話された。最後に「社内のいろいろな障害を克服する力になったのは、若い人のパワーであった。若い人の協力がなければ絶対に出来なかった」その情熱を高く評価した言葉で締めくくられた。なお、私は社内向けのピーアール用に作られたビデオで、まるで詩のようなすばらしい響きのセリフによって心の琴線を震わされるように感じながら、スライド+音楽を楽しんだ。

長崎大学猪山勝利先生の講義(3)「九州の地域おこしと青年活動」では九州の30くらいの青年団と20年に亘ってかかわってきたという先生の体験や考え方が非常に情熱的に語られ、その大きな声と話し の迫力に皆、圧倒された。一つ一つの話の筋はやや尻切れトンボの感を残しながら、次々に話が展開した。個人体験としての自殺未遂や加藤登喜子氏との親交にもおよび、地域では石垣島に始まりイタリアにおよび、地球規模で考えよとハッパをかけ、地域おこしについて熊本県立劇場館長鈴木健二氏が気づいた点（東京の文化をもって来るのではなく、地域をまわって伝統文化を掘り起こすことをやろう）に触れ、人間と社会との関わりでは坂本竜馬に学び、人と手を結び、楽しくなければいけないと説く。最後に地域おこしをおこなってきた代表的な町づくりを例としてあげ、それぞれの取り組みの歴史を紹介し、それぞれの特色を評価された。平井先生の講義(2)が終わったあと、私の隣に座っておられた猪山先生は、「体験に基づくすばらしい講義だったなあ。後がやりにくいなあ」と独り言のように呟いておられたが、講義が始まるや皆に向かって、「オッス！」とでっかい第一声を発しられたのが大変印象的であった。

鹿児島大学志賀美英先生の特別講義「国際交流の原点」では、日本にはなぜ国際化が必要なのかを特に産業との関係で説明され、東南アジアとの交流が重要なものであることを強調された。そして日本の経済的、技術的援助であるODA（政府開発援助）の実状を自らの体験（チリと日本との交流）を例にして、貿易やODAの機器援助などの硬い交流のみでなく、むしろ人と人との交流、市民レベルの交流、NGO活動などの“柔らかな交流”を重視し、国際化では相手を知ること大切であるが、相手に自分のことを良く知ってもらうことが大切であることを強調された。先生の講義はどちらかと言えば、基本的なことから丁寧に説明されていたが、国際協力事業団のメンバーとして南米チリに、分析機器の技術指導のため1年半滞在された実体験がベースになっており、重みのあるものであった。

九州工業大学長谷安朗先生の講義(4)「移民第2世代のアイデンティティ」－イギリスのエスニック・マイノリティと在日韓国朝鮮人との比較を通じて－では九州との関わりの深い朝鮮半島からの強制連行の歴史と韓国における教育が紹介され、イギリスにおけるエスニック・マイノリティ（インド人、イスラム教徒）の誕生の由来と現状、人種攻撃や同化政策の実態がビデオを交えて説明された。イギリス人も他の国へ出て行っているということを教育の中で示し、イギリス人は小さい時から多文化教育を受けている。イギリスにおける第2世代のアイデンティティとしては同化と分離という要素を同時にもち「文化変容」（または「文化触変」）のパターンが増えているとのデータが示された。在日韓国朝鮮人第3世代については、日本で生まれ、日本語で育ち、日本の文化を受け入れて育ち、韓国のことを知らないし、通名もあり、自分はむしろ日本人じゃないのかとの在日のジレンマが生じている。「日本にも韓国系日本人がいてもよいのではないか」ということを強く望んでいるという。討論（Ⅱ）にも参加させて貰い、フィールドを世界に求めている長谷先生の国際的な活動振り、世界的な視野に

基づいた考察を、敬意をもって伺った。

琉球大学大胡太郎先生の講義(5)「音と言葉・音楽と文学」—現代沖縄若者文化考—では日本の古典文学を研究している先生が、ご自身の体験との比較で若者文化の特徴を伝えようという思いの滲むものであった。特に沖縄特有のバンドによる沖縄音楽の現状からその文化のもつ意味を考えようとする。琉球大学山里純一先生の蛇三線による正調と大胡先生によるロックバンド風の共演は、圧巻であった。

久住山登山は第4日目に行われた。連日の晴天をそのまま受け継ぎ、雲ひとつ無いカンカン照りの一日であった。朝8時20分研修所玄関前集合、点呼を取った後、8時40分出発。小松地獄を通過、だらだら坂のアスファルト道路を牧ノ戸峠まで、9時55分に到着。しばらく休憩の後、10時25分牧ノ戸の休憩所を出発、途中1人の男子学生が身体の不調から下山。急勾配のコンクリート坂道をくっつけ山まで一気に登る。10時55分にくっつけ山の上に出て、少し休憩。その後くっつけ山の尾根づたいに扇ヶ鼻との分かれ道を経て、さらに千里浜を通過して12時15分に避難小屋に到着。昼食を取り、13時05分に久住山を目指して出発。ガレ場に足を取られながら、最後の急勾配を必死に登る。久住山から東にのびる尾根に出た途端に、目の前に久住山の広大な裾野、波野高原からさらに祖母・傾山の雄大な景色がパッと開ける。右手には阿蘇5岳の根子岳、高岳がくっきりと見える。13時45分に到着した山頂で記念写真を撮ったり、回りの山々の景色を眺めた後、14時を回って下山を開始した。ガレ場を下りるあちこちから悲鳴が聞こえ、完全に乾燥した石ころだらけの坂道は、滑る恐怖を味わうには絶好の場所。しかし、幸い誰一人滑り落ちることなく無事、避難小屋に到着。小休止。点呼の後さらに下山開始。といっても千里浜まで登りである。かつては高層湿原であったであろう千里浜の景観を楽しみながら(本当は痛みのはげしくなった足を引きずりながら)、ひたすらくっつけ山を目指す。くっつけ山にかかるとさらに足は重く、木の階段、大小の岩に足をかけ、膝に手をかけてあたかも身体を押し上げるように、一步一步登っていく。もう風景を楽しむどころではない。足の痛みを堪えることに気持ちが注がれる。くっつけ山を過ぎると急な下り。次第に膝がガクガクになる。膝が笑い出した。やがて、コンクリート舗装の道に入ると、ついに膝が泣き出した。階段状のところは調子をつけて、ガラガラのところは時折後ろ向きに歩いて、膝の負担を軽くしようと試みる。膝にとっては耐え難い苦痛の連続。ついに、牧ノ戸の休憩所に到着。休憩所では日陰には多くの人が集まっていて入る余地がない。冷たいジュースで喉を潤し、生き返った心地。しかし、まだ研修所まで約40分歩かなければならない。点呼の後、最後の難行を始めた。学生は皆元気な様子。我一人足の痛みと顎を出しそうな歩き方をしているのではないかと思いながら、必死に歩いた。ピッチは上がらない。特に女子学生達はべちゃくちゃ話ながら、元気元気の行進を続けている。次第に後ろの人たちに追い抜かれ、じりじりと遅れていく。西陽をまともに受けながら、下からはアスファルト道路の照り返しに焼かれて、長い道のりを歩く。始めがあったんだから、必ず終わりもあると思いながら、もう黙々と歩く。研

修所の屋根が見えてからも、いつまでも到着しない。ようやく最後のコーナーを曲がる如く、アスファルト道路から小松地獄への道に入った。地獄で志賀先生の「お帰り！」の声に励まされ、山の家を通過して研修所玄関前についに到着した。

地質屋である私は、調査で野山を歩く。その自信がすっかり打ち砕かれた。調査用の安全靴を履いたのが間違いであった。日常は柔らかい靴を履いているのに、このように長い距離を長時間かけて歩くのに、安全靴のような硬いものにしたのが間違いであった。しかも50を遠にすぎたこともあり、狭心症の発作の経験をもつ身であることも手伝って、すっかり自信を亡くしてしまった。大変暑い日だったので十分に水を飲みながら久住に登ったのであったが、どうやらすっかり苦汁（久住）をなめてしまったようだ。決して久住をなめたつもりは無かったのに。

今回の合宿共同授業に対する学生の取り組みは、これまでに聞かされていた従来の様子とはだいぶ違うのではないかと感じた。確かに聴講している時に居眠りしている学生も見かけたが、全体的にみて、受講態度や、質疑応答に活発さも認められ、講義内容の把握、質問の内容が講義との関連性を踏まえたものである点など一応妥当なものだったと思える。ただ、質問者が特定される傾向はあったこと、討議の内容がもう少し講義内容に踏み込んだものであってほしかったとの印象を持った。特に最後の全体討議では、オーガナイザーと学生との間で、一部に意識や意義の捉え方にズレがあり、そのために討議が噛み合わない部分があった。私には学生のテーマに対する捉え方や考察、議論の展開にまだ未熟な点があるためだと思えし、だからこそ、このような討議が経験として必要なことであると強く感じた。

時間外の学生諸君については、学生一人一人あるいはグループで有意義な交流が行われたようである。親睦会での声援は大学間を越えたものであり、席から席へと行き交う様子は共同授業参加者全体がひとつであるとの印象を持ったほどであった。

今回の企画に深く関わってこられた九州大学および当番校の琉球大学の皆様には大変なご苦勞に心から感謝申し上げます。私個人としては、学生とのなにげない会話をもち、有意義な講義を聴き、他大学の先生、事務官の皆様とお知り合いになれ、特に同室の方々とは実に楽しい時を過ごさせていただきました。心からお礼申し上げます。

第19回九州地区国立大学合宿共同授業 雑 感

南 部 元 義（熊本大学）

1994年、猛暑の夏の幕開けは、異例の早い梅雨明けだった。7月の声を聞かぬかぬかのうちに水銀柱はうなぎ昇りで、9日からの4泊5日、久住高原への“避暑”は端目には羨望の感さえあった。

昨年、熊本大学は合宿共同授業の当番校であり、催しの企画から準備、開催にいたる重大な任務をこれ全うし、恙なく番を終えている。で、その苦労話、裏話を4月の配置換時共同授業の職務分掌者となった頃から折にふれ聞かされていた。要約すると“去年大変だった分、今年は楽”が、4泊5日がまず大問題。血液型による性格分析に100%帰依しているわけではないが、その言うところ典型的なA型ともって認ずる自己分析、特に睡眠、しかも誘眠時に自宅でさえ過剰な神経を払っている身には、“4泊”がまずもって高過ぎるハードルであった。

次に参加学生。合宿共同授業開催の掲示から説明会、参加者の決定と、ここまでは例年以上にスムーズに事が運んだが、第1回の勉強会を開くあたりから何やらどうもあやしい。10名中なんと8名が女性、氏名・性別を伏せてレポートで選抜したのだからいたしかたなしといえばそれまでののだが、いかんせん多勢に無勢、いえ全員女性であってもそれはそれでいっこうにかまわないのだが、何となく。同行の事務官として傍観的に見ていると、どーも覇気が無い。まとまりも無い。方向性いまだ見えずの感もある。否、無事これ名馬、本番まで交代要員を見つけに走り回るような不幸が無いことを祈りつつ、週1回開かれる勉強会を眺めていた。

ま、昨年の“大変”からするとすこぶる“平和”な準備期間を経て、いざ鎌倉。出発の日も朝から蒼天、痛いほどの日射しを遮る教養玄関ひさしの小影にて、部長のお話を頂戴し、教務委員長、引率の長谷教官等を交えて記念撮影の後、タクシーに分乗、鹿大との合流地点へ向かうことになった。ところが、その合流地点がはっきりしないのだ。九州自動車道の熊本インター出口付近ということなのだが、インターの性格上出口（入口）が2つ有る。熊本方面出口？ 阿蘇方面出口？ さてどっちでしょう？ すべて私の確認ミス。いちかばちかの大バクチ、熊本方面出口！ ということにしてタクシーに乗ったは良いが、心は大きく揺れていて、無線から聞こえてくる別の車の運転手さんの親切な「九重に行くなら阿蘇出口では？」との声に一瞬大きくぐらつきながらも「これで良いのだ、これで」と自ら懇々言い聞かせ、はたしてそれは裏目に出た。無情にもそれとおぼしき南国交通のバスは、インターを阿蘇方面に降りて行ってしまった。あわれ一行12名、カルガモのお引越しよろしく、6車線にも広がる東バイパスを車の間をすり抜けて反対側に渡るのでありました。空には南中した太陽

呵々笑い。

しかし、これが唯一の“大変”であった。期間中、我熊大の学生諸君は見違えるような変身を遂げ、他大学とも自然に打ち解け、大いなる成果と感慨を脳裏に残し、13日の午後3時前出発の地へ戻ってきたのである。

この企画、まずやってみること、そして参加してみること、その結果が有意義であればこそ19年の歴史を刻み、各大学で教養部改革が言われる最中、“また来年”となって行くのだと強く感じた。もちろん、主管の九州大学、年毎の当番校（今年は琉球大学）のリーダーシップ、バックアップがあってこそこの話なのだが。そして私はといえば、案の定睡眠不足がたたり上唇部にヘルペスが出現、おかげでこの稿を書いている今、鼻の下には無精髭が乗っています。

九重合宿共同授業に参加して

平井敏彦（大分大学）

連日連夜30度をこす文字通りの“盛夏”のこの時期、四泊五日の九重合宿共同授業に参加できたのは、私にとっては思いもかけなかったラッキーな幾つかの出来事であった。

正直のところ、参加する迄は引き継ぎの悪さと不勉強も重なり、90分の講義を引き受けただけなのに、どうしてプライバシーも剥奪された五日間も拘束されるのかと理解に苦しむ所が多かった。

その見返りは食事の質はともかくとして、さわやかな五日間と泉源を見ながら入れる温泉、いつもの数倍の星がみえる夜空、九州ならではの地酒、自分の専門外の講義を他大学の先生から直接聞けると言うチャンスであったのは、期待していなかっただけに新たな発見であった。

学生にとっても、共同生活をしながら他大学の学生との交流、大勢の前で自分の意見を述べる機会（オポチュニティ）を得た者、生まれて初めてイッキ飲みを体験した女子学生等々、講義を受講して得られる……2単位よりはるかに貴重な(?)体験をした学生も多いはずだ。

「世界平和のため」と称して、世界中に大金をバラマキながらも馬鹿にされる日本人……、また「異質な日本人」……などと言わせない為にも、今からの若者はしっかりした教養を身につけ、言うべき時にはキチンと自分の意見が述べられる、自己主張の出来る若者になって欲しい。

そのような若者達の最初の訓練の場として、九重合宿は最適の授業であったと思う。

合宿共同授業の効果を高める為にも、教室の広さ（or 定員数）、OHPやVTRなどの最小限の機

材を整えて、是非とも継続して頂きたい行事である。

さわやかな四泊五日を何の事故もなく過ごせたのも、当番校の琉球大学並びに主管校である九州大学等の教職員の方々のお蔭である。

地元でもある大分大学の一員として、いろいろと考えさせられた合宿でもあった。

共同合宿授業に参加して

青木 眞 則（宮崎大学）

九州国立大学間共同授業に、大学に出向して3年目の私が参加したのは、他の大学の学生諸君はどんなことを考えているかを知りたいという軽い気持ちであった。すでに18回の歴史（奇しくも今回の参加学生の多くと同年齢？）をもつものであることも知らなかった。

共同合宿授業は、今後とも継続していくべきものであると思うので、いくつかの感想を述べてみたい。

- (1) まず準備の段階である。これは参加大学によってさまざまな対応があったであろうが、本学の場合どうも一過性のもとなっていたのではないかという点がまず反省させられた。そのため伝統化しつつある貴重な授業であるという認識に欠け、教官および学生の中にこれを継承していくための方策が講じられていなかったということである。共同授業を継承していく方策をたてる必要を痛感した。
- (2) 本年度のメインテーマ「九州・沖縄の自画像—過去・現在・未来—」であるが、自分たちの生活の場である地域の過去を通して現在は位置づけ、未来を展望するという設定意図はよく分かるし、この時間軸がなければ自らの将来展望を描くことはできない。しかしあまりにも問題の領域が広すぎたのではないかという気がする。むしろこのテーマは、共同合宿授業で時間をかけて追究すべき究極のテーマではなかつたかと思う。
- (3) フォーラム「九州・沖縄の若者と文化」は、学生が自主的に運営するのは、初めての試みであったという。発言者に多少の集中はあったが、少なくとも各大学の学生が1回は発言したのではないかと思うので、試みは成功であったと思う。欲をいえばメインテーマとの関連や「文化とはなにか」といったものについて、参加学生が共通の理解に近づくようにアドバイスをする必要があったのではなからうか。学生の「九州・沖縄の現在」の理解には「これでいいのかな」という多少気が

かりは残ったが、これを出発点として、メインテーマの課題が持続的に追究されればいいのではないかと思った。

- (4) 私自身についていえば、主管校、当番校のご苦労におぶさって、他の大学の学生の考えていることを知ることができたし、専門を異にする他の大学の人の考え方を学ぶことができたのは大変有難かった。また過酷なまでの快晴の久住山に、若い学生にあまり遅れもせず登山できたことは大収穫であった。大変感謝し、満足している。

楽しかった合宿授業

志賀美英（鹿児島大学）

前回（第18回）の報告書を見て、夜遅くまで酒を飲んだり、講義中居眠りをしたりする学生が多く、合宿授業はあまり意味がないといった内容の参加教官の感想がいくつか見られ、私もその覚悟で臨んだ。今回も確かにそうした学生が何人かは見られた。しかし、どの講義でも質疑応答が活発に展開されるなど、全体として成功であったと思う。

「楽しかった合宿授業」というこの感想文の題は、私の率直な気持ちを表している。参加学生も、教官も、またスタッフも、今回の合宿授業にきっと満足しているに違いない。学生間、大学間のすばらしい交流の場であったと思われる。私にとっては、懇親会での琉球大学学生のあの民謡と踊りは忘れがたい思い出になりそうだ。蛇味の音に誘われて、我を忘れて踊りまくった。私だけでなく、皆が喜びにあふれていた。こうした交流が、講義とは違った合宿授業のもう一つのねらいなのであろう。

参加して感じたことは他にも多くあるが、今後の指針になるかもしれないことをふたつほど述べようと思う。

- 1 今回参加学生の中に、中国からの留学生がひとりいた。彼女は、講義中にも積極的に質問をし、懇親会の場では写真を撮ったり、踊ったり、日本人学生の中であっておおいに満足していたようだった。私は彼女を見ていて、留学生の参加がもっと増えれば、この企画に新たな面での効果が期待できるのではないかと感じた。留学生は一般に日本人学生との交流の密度が薄いと聞く。彼らにとって他大学の学生との交流ができるばかりでなく、日本人学生にとっても交流のよい機会だ。合宿共同授業での交流は、学内での交流とはひと味も、ふた味も違う。今後、各大学から1～3名程度の留学生を参加させてはどうだろうか。
- 2 久住と言えば、火山である。学生が登山をしている間、私は九大山の家の眼前に広がる小松地獄

から大岳地熱発電所まで約2 kmにわたって火山噴気孔の調査を行い、多くのサンプルを採取した。久住火山は、大分の別府から阿蘇を経て島原の普賢岳に至る火山列上にあり、学問的に重要な火山である。また、付近には火山地帯特有の植物「みやまきりしま」（つつじの一種）の群生も見られ、植物学的にも興味深いところである。研修所前の庭に、これがたくさん植えられていたのに気付いた人もいるでしょう。こうした優れた自然環境の中にもかかわらず、外をぶらつく学生の姿が見られなかったのは少々残念に思う。

そこで、プログラムの中に自然に触れる企画（登山とは別の企画）を組み入れることができれば、合宿授業にまた別の効果が期待できるのではないだろうか。久住の自然に関する理解を深めるため、地学や生物などの専門家に講演を依頼するなどが考えられる。講師は、大学の教官とは限らず、地元先生や郷土史家などなら更によいだろう。

合宿共同授業に参加して

平 井 一 臣（鹿児島大学）

記録的な猛暑のなか、少しは下界よりも涼しいだろうと若干期待をもって今年の合宿共同授業に参加しましたが、山に登るとは太陽に近づくことなのだということを実感させていただきました。山から下りた翌日には、見事に腕の皮がむけてしまいました。

4泊5日の合宿授業に初参加の私でしたが、様々なご専門の先生方の熱のこもった講義や、予想以上に活発な学生の質疑討論を聞いて、大変刺激に満ちた5日間を過ごすことができました。私は、教養部で政治学を担当していますが、普段はなかなか自分の専門領域以外の方の話をじっくり聞く機会もありません。その意味では、文系ばかりではなく理系の方の講義も体験でき、またそれぞれの講義が個別の専門領域にとらわれない広い視野に立ったものだったので、非常に興味深く受講することができました。教養部の改組や一般教育の見直しがしきりに言われていますが、個々の専門領域にとらわれずに、自由な発想をもって現代的な課題について思索する作業のもつスリリングな醍醐味を味わうことができたように思います。

今回初めて試みられた学生自身によるフォーラムでは、かなり活発な議論も行われ、最初の試みとしてはよかったのではないかと思います。ただ、学生の討論を聞いて感じたことですが、フォーラムのテーマを具体的な問題に引きつけて議論を展開するだけの力量がやや不足していたように思いますし、また、積極的に討論に参加する学生がいる一方で、お客さんにとどまっている学生もまた多数い

たように思います。私自身も反省しているのですが、やはり個々の大学での事前の準備段階に工夫の余地が残されているような気がします。今後改善できる点は改善しながら、今回のようになるべく学生自身の主体性を引き出す方向で合宿授業が行われればよいのではないかと思います。

合宿共同授業を無事終えることができ、当番校の琉球大学の方々をはじめとして関係者の方々に感謝いたしております。また、参加した百余名の学生の皆さんが、九重での五日間を通して、大学で学ぶことの意味、自ら考えることの意味を再発見し、今後の学生生活に役立てていかれることを期待しております。

第19回九州地区国立大学間合宿共同授業をふりかえって

泊 伸 人 (鹿児島大学)

雨が異常に多かった去年に比べ、日照り続きのような今年の天候には少々驚かされます。

例年、7月10日過ぎまで、梅雨の時期が続き、この研修に参加したことのある人々の話では、みんなが期待する久住山登山も天候に恵まれず途中で引き返したりすることが多いということでしたが、今年のこの天候なら頂上に立てるのではないかと期待をしながら7月9日朝、鹿児島を後にしたのを思い出します。

鹿大、琉大、鹿体大、熊大、の学生や教職員52名で、夕方少々時間オーバー気味で無事に到着しました。

思っていたより周りの自然環境や研修所の建物などがすばらしく、合宿研修の場としては良い所にあるなあと思いました。

この研修の事務担当者として学生を引率していく上で一番の気掛かりや心配事は、講義が終わって自由討議、自由時間、就寝までに学生が酒を飲んで歌い騒ぐことへの注意、見廻り、などが大変だと聞いていたことでした。私が宿泊した研修所では、琉球大の教職員の方々の規律正しい監督の下で、初日から閉講式まで割におとなしかったのではないかと印象です。朝食、夕食時の準備、片付け等も殆ど支障なく行われていたのではないかと思います。学生の受講態度や討議、発表等、事前に相当な予備知識を入れてきている学生も多くて結構熱の入った有意義なものだったように見えました。

画期的で、その方法では全国一の規模を持つ九電の地熱発電所施設見学、そして期待した登山は、登山指導教官の山本先生の厳重な説明や注意に特に熱が入ったほど、当日の天候が良すぎて、たった1日の歩行で真っ黒に日焼けしたぐらいでした。

頂上から見渡す阿蘇連山などこの夏の良い思い出になりました。

登頂した全員が無事に研修所に帰り着き、その夜の各大学間の懇親会は、さぞかしみんな疲れているだろうとおもいきや、見ているほうが驚くほどの元気な若さを見せつけられたものでした。

予定通りに無事に鹿児島に帰り着き、良い経験をしたという思いと安堵感をかみしめています。

最後に主管校である九州大学の教職員の方々をはじめとして、フォーラムで論議いただいた諸先生方、また当番校の琉球大学の教職員の方々にとっても良いチームワークを勉強させていただきました。心からお礼申し上げます。

合宿共同授業参加記

山 里 純 一 (琉球大学)

九重での合宿共同授業に参加するのは今回で二度目で、いずれも当番校の時にお鉢がまわってきた。前回は、講義と帰りの引率が私の任務であったが、今回は、初めての試みである学生主体のフォーラムのコメンテーターという役である。しかしそれぞれの講義担当者もコメンテーターに加わることになっていたため、私の場合は、主に司会進行の補佐的役割を自認していたが、正直言って、前回に比べて今回は精神的な負担が大きかったような気がする。テーマが「若者と文化」ということで、毎年、合宿授業の懇親会の名物である琉球大学の余興をリードしている学生が所属する「八重山芸能研究会」というサークルの顧問をつとめているという関係のみでその役を仰せつかったため、私自身とまどいがあったからである。

司会も基調発題も学生自身が行うという合宿授業では異例のフォーラムが、果して思惑通り成功するであろうか、周囲の者が楽観的であればあるだけプレッシャーがかかった。文化といっても多種多様であり、さまざまな文化の問題に対して、学生の間でどこまで活発な意見交換ができるのか、あるいは全く意見が出ないのではないかと、その場合はどうつなぐのか、心配の種は尽きることがなかった。司会も琉球大学の参加学生の中から出すことになっていたため、司会を助けるためにも、琉大の学生には特に自覚をもってもらわねばならない。そのため、司会者のトレーニングと他の参加学生の自発性を促すため、二、三度、模擬フォーラムを行ったりして臨んだ。当日のフォーラムでは、結局は琉大の学生は一人も発言しなかったが、特定の数人の学生を中心に白熱した議論があり、初めての試みとしては、まずまずの成功をおさめたと、胸をなでおろしたものである。

文化というのがあまりにとらえにくい概念であるというのが学生たちの率直な感想のようであり、

今後こうしたスタイルのフォーラムを行う際にはテーマの設定にあたって工夫が必要であろう。

最後に、各大学が教養部廃止を打ち出す中、我が琉球大学も教養部廃止の方向で組織改革が進んでいる。したがって教養部廃止後の合宿共同授業の行方が気になるところであるが、この有意義な企画が今後とも継続・発展することを願ってやまない。

2 度目の合宿共同授業に参加して

長 井 孝 一（琉球大学）

合宿共同授業への参加はこれが2度目である。2年前の第17回合宿共同授業に初めて参加し、他大学の学生達や教職員の方々と触れ合い、語り合うという得難い体験を通して、大変有意義な時間を過ごしたことを今でも良く覚えている。その時に、合宿所で合宿授業の運営にあたる教官と事務官の皆さんの御苦勞を目にするにつけ、「当番校は大変だな」とつくづく思ったものである。しかし、まさか自分自身が当番校の教官として2年後に再び九重の地を踏むことになるとは思ってもいなかった。

今回、2度目の合宿授業に参加するにあたって、2年前の合宿授業の全体討議の席で学生達から出された1つの意見（要求）を思い出した。その意見は「講義は教官が一方的に話す方式で大学にいる時と全く変わりが無い。もっと自分達にも発言させてほしい」という内容であった（過去の報告書でも同じような学生の要求が指摘されている）。自分の持ち時間の大部分を講義に使ってしまい、質疑の時間をほとんど残せなかった講師の一人として、深く反省させられるとともに、学生達から何か宿題を与えられたような気持ちになったものである。こういった学生の要求に応える意味で、講義時間のうち15分を質疑応答時間としてあらかじめ残す今回の方法は大変良かったと思う。講師の先生方がきちんと時間を守られ、学生達からも積極的に質問等が出されたことによって、この時間が生き、大成功の結果をおさめたと思う。

フォーラムの運営を学生にまかせるという今回の試みも、このような学生の要求に応える意味で企画されたのだと思う。ただ、初めての試みだけに、うまくいくかどうか心配される向きも多かった。私自身も、フォーラムのテーマが「若者と文化」という捕えづらいテーマであるだけに、合宿に参加する前からその成否が気になってしかたがなかった（テーマが環境問題や平和問題であったならば、少なくとも議論の盛り上がりについては心配しなかったと思う）。実際にフォーラムや全体討議の席で、学生から「抽象的なテーマなので意見が出しにくい、環境問題などの身近なテーマにしてほしかった」というような意見が多く出された。しかし、フォーラムや全体討議を聞いた後知恵であるが、

この捕えづら、あるいは日頃は意識することの少ないテーマについて考えさせることこそが、今回のメインテーマやフォーラムのテーマを設定された先生方の真の狙いだったのではないかと思う。

若者（学生）は、若いゆえに、若者であることを特に意識しては生きてはいない。自分自身の経験に照らし合わせてみても、若さとは失いかけてはじめて意識するもののように思える（たとえば私自身、記憶力がこんなにも衰える日が来ようとは若い時には考えもしなかった）。教養部教官として現在の学生をながめる時、「何のために大学に入ったのか」という学生の目的意識のレベルの違いを痛感せずにはいられない（試験やレポートの結果に、もともとの各人の能力差とはとても考えられない驚くべき差となって現れてくる）。そして、新入生相手の最初の講義の時などに、「大学での4年間をどう過ごすかによって、皆さんの人生は随分違ったものになるよ。しかし残念なことに、皆さんの大部分が本当にそのことに気づくのは、ずっとずっと先のことになるんだけどね」というような意味のことをついついしゃべってしまうのである。今回の合宿授業は学生に、普段はあまり意識することのない自己について見つめなおす機会、言葉を変えれば、各人がメインテーマにもある各人の自画像をどのように描いていくべきかについて考える得難い機会をあたえたのではないかと思う。合宿最後の全体討議の席での、しだいしだいに盛り上がっていく様子を見ながら、今回の企画が成功だったと確信せずにはいられなかった。

合宿共同授業に参加して

福島良一（琉球大学）

今回、学生引率として合宿共同授業に参加させていただきました。教養部に移籍して半年ばかり経った頃に今回のお話が来ましたため、合宿共同授業というものが如何なるものか全くわからないままに、引率者ということで気軽にお引き受けをした次第であります。

ところが、私の予想とは異なり、合宿共同授業での生活は過密なスケジュールに追われ極めてハードなものでした。しかし、私の所属する琉球大学ならびに各大学の教職員の方々の熱意に接する中で、そのパワーに支えられつつ、与えられた任務を失敗を繰り返しながらも何とか果たしていくことができました。また、学生との交流も私にとって大きな励みとなってくれました。特に、懇親会で踊る羽目になった琉球舞踊の連夜に互る練習は楽しいものでした。初めて生で聴いた蛇皮線の澄んだ音色と旋律は、東京出身の私にとっては新鮮なもので、今でも印象深く耳の奥底に残っています。

ところで、この合宿のメインである共同授業について振り返ってみますと、一番気になったのが学

生の受講姿勢でした。ハードスケジュールによる疲労のせいか、せっかくの興味深い講義も睡魔との闘いの中で十分に聞けずじまいに終わったと思われる学生がやや見受けられました。また、フォーラムや質疑応答において、特定の学生のみが発言する傾向が強かったことも残念に思われました。合宿前に、各大学において参加学生に対し合宿授業に向けての心構えをヨリ一層徹底させる指導が必要なのではないかと感じられました。いずれにせよ、学生諸君の積極姿勢が望まれるところです。

正直に申しまして、合宿においてはプライベートな時間はほとんど持たず、また疲労もたまって逃げ出したい気分になることもなかったわけではありませんが、人との出会い、あるいは大学間の交流の中で、感動的な場面に幾度が接することができ、さらにまた晴天の下に久しぶりの登山もすることができ、私にとっては非常に清々しい思い出をつくることができました。合宿共同授業のあり方については色々な議論があるようですが、この合宿授業は参加した学生に対し有意義な経験を提供し得る場であると思われるので、今後とも改良を加えつつ継続されることを望んでおります。

最後に、種々ご指導くださった参加大学の教職員の皆様、ならびに親しく接してくれた学生諸君に心からお礼を申し上げます。

第19回大学間合宿共同授業を終えて

大 胡 太 郎（琉球大学）

毎年九州で合宿共同授業というのがあって、琉大生も参加している。今年のテーマは「若者文化」だから、大胡さん、行ってちょっと話をきてよ、と琉大教養部の仲程先生に言われたのが三月頃だったか。琉大に赴任してきてまだ一年目の私は、なにがなんだかわからないまま、「若者文化」というテーマに魅かれ承諾してしまっていた。

今にして思えば、合宿共同授業の主旨をまったく理解せぬままの無謀な承諾であったのだが、講義内容を計画し終えるまでの間、全体の主旨や雰囲気を知らないままだったので、あまり堅苦しく考えずに済んだのはかえってよかったかもしれない。包括性のあるテーマが設定されていたことによって、素材しだいでは学生たちに関心をもたせやすい教材を構成することが可能であるからだ。とは言うものの、私自身は、二種類作成したレジュメのどちらで講義を行うのか出発の朝まで迷い続けることになったのだが。

山里先生と三線の実演をしようということになったのは、久住に着いてからであったし、かなりゆきあたりばったりの内容であったが、おおまかには民俗学的、歴史学的にたどることによって、未定

義の（学生たちにとってはおそらくほとんど無自覚なままの）「若者」や「文化」という概念を、こちら側から定義を与えるのではなく、学生が自分自身で自前の定義を作り、自覚的にその中を生きるようになるきっかけでも作れたら、という意図によって構成した授業であった。うまくいったかどうかは自信ないが、今後の学生たちの学びかた、生きかたにゆだねよう。

最後になりましたが、教官の方々、事務官の方々、御苦労様でした。

第19回合宿共同授業回想記

平 良 雅 彦（琉球大学）

今回の合宿共同授業の感想を述べる前に、主管校の九州大学及び前年度当番校の熊本大学にお礼を申し上げたいと思います。九州大学には機器類の準備、公用車の手配等ご協力頂き、また、熊本大学には運営方法等についてご教示、アドバイス等を頂き本当にありがとうございました。心からお礼申し上げます。

さて、今回の合宿授業は、本学が当番校に当たり、メインテーマ、フォーラムの方法及び参加教職員の人選等、早目に決定する事項があり、前年から準備を開始した。前年11月には、総合科目委員会でメインテーマ、フォーラムの運営方法等が決定され、参加教職員も決定された。前年12月には企画委員会、本年4月には実施委員会と出席し、6月上旬には現地へ事前調査に出かけ、部屋割り等、細かく確認を行った。特に、研修所と山の家の間に体育館が建設中であり、通行に支障があることをこの時初めて知り、前もって対策を立てることができた。やはり、事前調査は必要であることを痛感した次第である。6月下旬になると準備も最終段階に入り、事前調査の結果を基に最終チェック作業を行い、必要物品を宅急便で全て送り、6月末には、準備が完了した。

合宿授業前日の7月8日、研修所近くの筋湯に到着。天候は快晴で梅雨は明けたとのことであり、“琉大が当番校の時は、天気は晴れる”とのジンクスが今回も生きていることを実感しながら大成功の予感が込み上げてきた。筋湯で一泊し、翌7月9日の朝、研修所に到着、授業の準備に取りかかった。午前中にはほぼ準備も完了し、ホッと一息つきながら、遠くに連なる九重の山並みを眺めていると、いよいよ始まる合宿授業を前に緊張感が高まってくるのを押さえることができなかった。

午後2時過ぎに受付が始まり、午後3時頃には殆どの大学が到着した。早速、教官打合せ会を行い、引き続き最初の講義へと進んでいった。夕食後行われた交歓会では、自己紹介を交えながら和やかに歓談が行われた。交歓会が終了すると、学生は各自の部屋で講義のレポート作成に取りかかった。こ

の講義毎のレポート作成は、合宿授業に非常に有効だと思うので、今後も継続して欲しい。

さて、心配された学生の夜の交流会での飲酒は、比較的小となしく飲んでいる程度で、最後までこの調子でいって欲しいものだと思うのだった。

なお、今回から講義時及び夜間の巡回業務には、各大学の教職員の方々にも協力してもらい、非常に助かった。

翌2日目も日程がスムーズに消化され、八丁原地熱発電所の見学等を行った。

第3日目の講義(5)では、担当教官の大胡先生と山里先生による“島唄”が“サンシン”(三味線)で披露され、これまでの合宿授業にはないユニークな一面もあり、学生達も喜んでいる様子であった。

午後から行われたフォーラムは、従来とは違う方法を取り、学生主体に運営させるということで不安はあったが、結構、活発な意見が出され、成功の感がした。成功したといえば、もう一つ登山が挙げられる。登山については、ここ数年、天候不良のため、久住山の登頂は成功していないことを聞いていたので、今回は是非、登頂を実現したいと思っていた。第4日目の登山当日は朝から快晴で、日射病が心配されるほどの好天気であった。4、5時間かけて久住山の山頂に着いた時は、初めての登山のせいもあって、思わず“バンザイ”と叫んでいた。ケガ人もなく無事終了したが、この登山の成功で今回の合宿授業は非常に充実したものとなったと確信している。

この合宿授業も来年で第20回目になり、20歳を迎える。今年の10月頃には、現在、研修所横に建設中の体育館も完成すると聞いているので、来年は登山以外に体育館を利用した授業も是非取り入れ、これまでより充実した授業内容となるよう期待したい。

最後に、今回の合宿共同授業が無事終了したのも参加者全員のおかげだと感謝しております。主管校の九州大学を始め、各大学の教職員、学生の皆さん及び研修所の方々に厚くお礼申し上げます。

合宿共同授業の運営に参加して

平 田 勉(琉球大学)

3年前に引率補助として参加したときは、大分趣が異なり当番校のスタッフとして運営に参加すると種々の業務があり、少々戸惑いながらの毎日であった。

沖縄を午前8時10分に出発し、夕方の3時頃筋湯に着いた。その間、飛行機、電車、バスと乗り継ぎ、夕方の3時過ぎやっと筋湯に着いた。7時間の旅であった。その日のうちに明日からの授業運営

の打ち合わせを約2時間ほど行い、やっと休憩の時間が取れた。

夕食時間まで少々の自由時間が得られたので、温泉好きの私は早速、温泉に入り旅の疲れを取った。筋湯の打たせ湯は広く又快適であった。このように素晴らしい温泉は全国でも少ないだろう。夕食時には、出陣式を行いオーガナイザーの宮城先生を中心にスタッフの気持ちが一つになった。

初日、宅急便で送った荷物が研修所に到着しており、早速、荷をほどき設営にかかった。設営は円滑にいき、参加者を迎えることができた。受付も各大学の協力を得て円滑に済んだ。受付のとき、参加大学からの励ましを頂いたときはとても嬉しかった。

開講式から始まり、講義1、夕食、交歓会、自由討議、自由時間、消灯・就寝と無事終了し幸先の良いスタートであった。

2日目は、講義が3つ、施設見学、討議があり学生たちもハードスケジュールではあったが、無事一日を終えることができた。後で聞いた話だが、3講義分のレポートはかなりきつく、他大学の学生との交流時間が殆どなく不満であったらしい。また、広い講義室がないため、食堂を講義室に当てての授業のため、講師も学生も苦労した様子だった。

3日目は、今回の目玉であるフォーラムがあり学生たちの関心も高かったようである。私はその最中も種々の段取りがあり途中、学生たちの意見を聞くことができなかったが、それでも熱心に「九州・沖縄の若者と文化」について議論が成されているのは良く分かった。私も彼等の年頃であればあの様であったかと思った。若いとは素晴らしいことだと、しみじみ思った。夜は明日の登山に備えてであろう、学生たちも前夜に比べ静かであった。

4日目、真っ青な空、雲一つない全くの晴天で、沖縄を発つ前、雨天による中止を危惧したことが全くの徒労であった。それにしても、全くの晴天で、日射病を心配させられるような天気であった。避暑地久住が今年は避暑地にならないほど気温も上がり昨年の冷夏とは全く逆になった。このような天候はめずらしいと地元の人もいうほどであった。

朝、9時に出発した登山も全員無事下山できた。学生達も頂上から眺めた景色で、登山の苦労も消し飛び異口同音「素晴らしかった、感動した」と話していた。

懇親会では登山の疲れなど全くないかのように、にぎやかに交流していた。最後の夜だけに学生達は時間を惜しむように語らい、話は尽きないようだった。

5日目、昨日深夜まで語り合ったと思われるが、全員が宿舎の清掃・荷造りをし、全体討議に臨んだ。全体討議はこの合宿共同授業に参加した思いを胸に話すので、言葉は少ないが全員が理解していた。バスが予定どおり来て、長く短いこの合宿共同授業を無事解散。

私たちも設営に使った荷物を返送し、帰途についた。

合宿共同授業及び合宿生活についての意見

平 沢 信 康（鹿屋体育大学）

例年は梅雨空が多いそうだが、第19回目の今年は終始、快晴に恵まれ爽やかであった。本学の参加は第16回からで、今年が4回目。12大学中、最少学生2名を引率しての参加であった。

なんとなく、学生・院生時代に行った東京の八王子大学共同セミナーの記憶がよみがえり、若干その印象と重なるものがあった。

講義中、質問・意見を積極的に述べる学生が少なくなかったことは印象的であり、予想外のこともあった。とくに懇親会あたりから次第に学生たちの個性が浮き彫りになり、素晴らしい交流の場となった。他大学の学生との語らいも、異分野の研究者と交流できたことも勉強になり、楽しかった。5日目の閉講式では、感さわまって涙ぐむ学生の姿も幾人か見られ、鹿児島行きのバスの帰途、熊本大学教養部前では、琉球大学の学生の音頭で懇親会で披露された舞踊が再度始まり熊大生との別れを惜しんだ。こうした合宿形式の講義は、国費をかけて続ける意義があり、否、必要性は今日ますます高まっているのではあるまいか。

総体的に、盛り上がりを見せた成功した企画であった。最後に、あえて注文と課題を指摘すれば以下の通りである。

到着後まもなく、「先生ここ汚いですね」とウチの学生。体育館新築より前に本館の改築に国費を投入すべきであったのではあるまいか。昨今の学生は清潔な生活環境で育ってきたいるのだから。

講義は必ずしもメインテーマ「九州沖縄の自我像—過去・現在・未来—」に即しているとは思えなかった。合致していなくとも、さほど弊害はなかったが、今後メインテーマと各講義との関係をどう考えるか、再考が求められよう。

2日目の夜、学生たちがなかなか床に就かず、酔っぱらって吐く者が出て迷惑した学生がいたが、定刻どおり当番の教官が見回っていればトラブルが避けられたと考えられる。

参加人数の多い講義やフォーラムでは発言者が特定してしまう。2時間ほど、あるいは2セッションくらい、7-8人から多くて10人の小グループを作って、テーマにとらわれずに話が出るエンカウンター・グループ形式の時間を設けてはいかがだろうか。学生たちは「ふれあい」を強く求めていることが今回参加してみてよくわかった。座談形式で車座になって、皆が話しやすい規模のミーティングが必要であろう（教職員もとくにリードせず1、2名ずつグループに加わる）。

3. 合宿共同授業に関する参加学生のアンケート回答

合宿共同授業に関するアンケートの調査結果

回答率 100% (84/84)

1. この共同授業に参加することを決めたきっかけは何ですか。

(1) 自分から進んで参加した。	58.3%
(2) 友人(たち)にすすめられて参加した。	27.4%
(3) 大学(教官・事務官)にすすめられて参加した。	6.0%
(4) その他	8.3%

2. この共同授業にどの程度期待していましたか。

(1) 非常に期待していた。	16.7%
(2) かなり期待していた。	15.4%
(3) ある程度期待していた。	51.2%
(4) あまり期待していなかった。	16.7%

3. この共同授業を終わろうとしている今、あなたはどの程度満足していますか。

(1) 非常に満足している。	36.9%
(2) かなり満足している。	44.1%
(3) やや不満である。	19.0%
(4) 全く不満である。	0.0%

4. この共同授業の開催に適切な時期について意見を述べて下さい。

(1) 夏期休業に入る7月10日過ぎ	79.8%
(2) 10月初め	3.6%
(3) 10月中旬	4.7%
(4) 12月下旬	1.2%
(5) その他	10.7%

5. 日程(期間)は今回は5日間でしたが、一般に何日くらいが適当と思いますか。

(1) 3日間程度	3.6%
(2) 4日間程度	5.9%
(3) 5日間程度	67.9%
(4) その他	22.6%

4. 参加学生の感想

今回の共同授業を終了するにあたって、考えていること、学んだと思うことが数点ある。

1つに、自己の再認識をすすめたいと思ったことである。これは、共同授業の前から私の頭の中に存在していたことであるが、今回の講義を聞いていて、多くのことがこの問題に回帰してゆくのではないかと思い、より重要なこととして、頭の中に位置付けされた。これは社会というものが“交流”というもので成り立ってゆく関係上重要であると思う。

2つ目に“ふれあい”という言葉である。交流だけでなく、様々なものとのふれあいの大切さを痛感した。特に私は今回の参加の目的として、現在地だけにとらわれない大きな視野の獲得というものを、1つ持って参加したわけなので、他大学の学生の様々な話を聞き、また、こちらから話し、心と心がふれあえたことをとてもうれしく思う。

3つ目に“行動”ということである。話し合った結果として行動の大切さがぼんやりとうかび上ってきた。より良くなるためには行動が不可欠であること、勇気をもって行動することによって、より自己が磨かれてゆくのではないかとういことを学んだ。

最後に、今回、自由討議の最後でオーガナイザーの宮城先生が言われた言葉でしめようと思う。

“教養とはより多くの人々の立場に立って考えることができることである”

この言葉を胸に、大学生活を送りたい。

(福岡教育大学・男)

まず、一言、本当に良かったと思います。その良かったと思うところは、各地の同世代の人（いわゆる大学生）と普通、友人同志ではあまり語らないようなちょっと硬い話を、真剣に考え話し合うことができたということです。私は一度も発表することができませんでした。それは、やはり、まだ恥ずかしいと思う幼稚な心があったからですが。しかし、自分と同じ考えの人に“ふむふむ”と同意して、私の思っていたことを言ってくれた。そして、このように考えているのは、自分だけではないのだなと思っていました。そして、討議会やフォーラムを通して一番感じたことは、物事に結論というものはないと思いました。特にこの話し合いの場合では。いろんな人がいる、その分だけいろんな意見がある。そのような意見を、排斥するようなことはできないのです。自分と違うことを考えているということがわかれば、それからの自分の考えや行動に、何かしら変化が加えられ、良い方向に進むと思います。

文化について。文化というものは、人が意図的に創るものではないし、意図的に残すものではない。

という考えの方向に私は寄っています。文化は、人が楽しみ、必要と感じているところに自然とできる。文化は人が生きている証拠のように思えます。誰かが言ったように、このようにみんなが話し合っていることも文化なのだと。先生たちから、いろいろと制限されて、それに反論して一所懸命になることも。だと私は今のところ思っています。この考えは、これから、また様々な人と触れ合って変わることはありますが、少なくとも今は、こういう考えの方向にあります。

最後に、この合宿で自分の未熟さを痛く感じました。その未熟さというのは、大学生というもう大人の歳でありながら、人前で、自分の意見を、気持ちを伝えることがまだまだできていなかったことです。話し合いの輪に参加して、考えてはいます。(少々とろいために遅れてしまうということもあるのですが)、しかし、言葉にできないのです。上手に言葉にするというのは、誰にでもできないことでしょうか、少なくとも、皆のようにさえ、できていないような気がするのです。だから、だんだん無口になってきているようでした。よって、今度からは、自分を表現することにもっと力を入れようと思います。そうして話のできる人となり、その場その場を、どんな時でも一所懸命に生きることができるような人間をめざして成長しようと思いました。

(九州大学・女)

先ず、この共同授業の期間中は非常に充実した日々であったことは間違いない。講義では特に③「九州の地域おこしと青年活動」について、九州の各地域のあり方について、考えさせられたのが特に印象に残った。北陸の金沢から九大にやって来たばかりで、九州の地域性や地域の特徴について全く知らなかった僕にとって、各講義の中で学ばされたことや、得られたものは非常に多かったものと思う。また、登山の経験も本当に久しぶりとあって、道行く先でいろいろと新鮮な驚きがあったし、久住山山頂に到達した時にはまさに心洗われる思いがしたものであった。雨天で登山が中止になる年も多いというだけに、我々は本当に恵まれていたと思う。ただ、残念だったことと言えば、他大学の学生との交流があまり深まらなかったことだろうか。自分はもともと人づき合いが苦手なほうで、人の心をつかめむのが下手なものだから、仕様がなかったのだが、それでも実際にはそれなりにいろいろな人と話げたのに、まだまだ不満に思うのは、自分の身近なところに、人づき合いが上手で、いろいろな人と気軽に話せるような人がいたからであろうか。それとも自分の個性があまり十分に発現できなかったからなのだろうか。

あと思ったこととしては、質疑応答や討議の場において、限られた人しか意見を述べていなかったという点である。自分も人のことが言える立場ではないのだが、やはり我々日本人は自己主張が下手というか、なかなかできないのだろうか、と思わずにはいられなかった。考えてみれば、文化とは一

人ひとりの「自己表現」というか、「自己発現」の中から生まれるものではないだろうか。自己主張ができなければ素晴らしい文化もなかなか生まれにくいように思う。昨日（4日目）の懇親会について「これまでの講義などのうっぷんを一気に晴らすようにエネルギーが爆発していた」と言っていた人がいたが、やはり日本人は酒が入らなければ「自己発現」ができない、というか本音が出ないのだろう。この様に考えると、この酒をよく飲むという日本の習慣は、「自己主張ができない」「自己主張が下手だ」という日本人の性格が反映されたものと思えてきたのだが、いかがだろうか。

（九州大学・男）

一浪して大学に入ったものの、人見知りが激しいために、あまり友達もできず、満足した大学生活を送れていなかった。そういう時にこの合宿の募集をみて、5日間もの合宿で、講義もある上に討論という場まであるということで、自己改革を行うことができるかもしれないと思い、自分から積極的に参加した。

実際に参加してみて、非常によかったと思う。高校時代は、陸上にあけくれ、陸上以外のことには目を向けずに過ごし、浪人時代は、受験勉強以外のことには目をむすげに過ごしてきた自分にとって、討論等で他の人の意見をきくことにより、いろいろなことに目を向け、自ら考え、よいと思ったことは実行に移すということの大切さを知ることができた。また、法学部にいるのにもかかわらず、討論の場を敬遠していたのだが、今回の合宿で、発表は一度もすることはなかったものの、他の人の様々な意見をきいて、自分なりの意見をもつことができるようになった。登山は、かなりきつかったけど、共に苦しいことをのりこえることによって、同じ大学の人はもちろん、他の大学の人も心から親ばくを深めることができたと思う。講義に関しては、必ずレポートの提出が義務づけられたが、レポートをかくことが苦手であったけれども、この5日間を通して、自然にレポートのかき方みたいなものも身につけることができたように思う。

最後に、この合宿では2単位というものがもらえるが、これだけ自分にとってはプラスになった合宿で、単位までもらえるなんて自分はあまりにもぜいたくすぎると思う程である。友人達は、私が合宿に参加することに対して「いくら単位がもらえるからって……」という言い方をしたが、単位がなくても、私は参加したいと今は思う程だ。大学最初の夏休みで、このような貴重な体験をできて、今年こそ、これから先も充実した夏休みを送れそうである。目的の“自己改革”大成功である。

（九州大学・女）

私が、この共同授業に参加しようと思ったのは、いろんな人に出会えると思ったからです。それに2単位もとれるなんて行かなきゃ損だと思いやってきました。今、共同授業を終えて私は、自分をあまり出せなかった事がとても残念です。くやしいです。本当に自分がなさけないです。私は今、自分を変えたくてしょうがありません。前からこの気持ちはあったのですが、今、その思いがもうれつにわきあがっています。それはきっとここで出あった人々が、自分をさらけだして、輝いていたその姿がとてもすばらしかったからだと思います。今度こそ、こういう機会にめぐまれたら、ひくことなく、自分を出していきたいと思うし、これからの日常生活の中でも、そうかんたんには私にはできないけれど、自分をさらけだす努力をしたいと思います。

また、先生方の講義では、今まで考えもしなかったことを考えさせられたり、中には難しすぎてわからない事もありました。それなのにたった何十分かで自分の安易な考えをレポートに書いてしまったような気がして申しわけない気持ちがあります。まだまだ話していない人たちと話したいから、今になって時間がおしいです。今から自分をすぐかえることはできないけれど、もし今度も参加することができたらそのときには、今回とは違った自分でいたいと思います。

(佐賀大学・女)

最初は、2単位もらえるからという気持ちで参加したけど、今は、本当にそれ以上のものを得たんだということを実感している。まず、他の大学の友達に出逢い、様々な人を見ることができたし、また、数種の分野から見た物事の考え方も学んだ。そして、久住の登山では、自然の大きさをあらためて感じ、この自然を守りたいと思った。

最後の全体討議では、特に終り方になって皆、今まであまり言わなかった人までが発言し、自分は発言しなかったが、皆の言葉を聞いているだけで、非常に大きなものを得ることができたと思うし、多分、様々な何かを考えてはいても、結局は言葉にできないもどかしさみたいなものも感じている人も少なくなかったと思う。

自分は、本当に討議でも、フォーラムでも、自分の意見は、あのフォーラムの資料みたいなのに書いた分しか発表できなかったけど、人の意見を聞いてみて、かなりプラスになった部分もあると思う。本当に短い期間ではあったけれど、内容のつまった、得るものの大きな5日間であったことを皆様に感謝したいと思う。

(佐賀大学・男)

私はこの共同授業に、ほとんどといってよい程期待をもたなかった。ただ楽しければそれで充分だと、初めはそんな情ない考えしかもっていなかった。しかし、この合宿で時間が過ぎるにつれて、そのような考えはどこかへっ飛んでしまった。

様々な講義についての各大学同士の討論。私は初めてこのような機会をもったし、みんなのしっかりした考えの持ち方に、ただただ感心するばかりだった。歳もそれ程変わらない者が、1つの事についてこんなにも意見を述べれるなんて、つくづく自分の未熟さを痛感した。

私が今回、最も感動したのは、沖縄の学生に対してである。私が今まで関わりを持つことのできなかった沖縄の伝統に、体でじかに触れ合うことができた。私は沖縄の学生のことをきっと一生忘れなと思うし、また彼らはこの日本を代表する若者として誇りに思える。

合宿で得たこと、それは何であろうか。文章に表現しようとしてもうまく伝えられないし、紙の上だけに残していくことはもったいないと思う。この合宿で感じたことはとても多くある。この合宿に参加しなければ味わえなかった気持ち。私はこのたくさんの想いを大切にしたいし、少しずつでもいいから自分の周りの人間に伝えていきたいと思う。みんなに出逢うことができて心からうれしく思えた。

(長崎大学・女)

私は友人のキャンセルによってこの合宿に来ましたが、前々から行きたいと思っていました。大学では修学旅行のようなものもないし、旅行気分でみんなと楽しくやれそうだ、という軽い考えのものでした。しかし、合宿前に勉強会を開いて、本当に学びに行くのだと少しずつ実感してきました。そしてこの5日間が無事に終わろうとするわけですが、いくつか心に残ったことがあります。

1つは、琉球大学の人たちです。初日縁あって、ベランダで琉大の人と話す機会ができ、先生達のいろいろな話を聞いて、すごく心に残っています。私がリクエストした島唄のメロディーはきっと忘れなと思います。琉大のみなさんありがとうございました。

2つ目は、みんなが真剣にいろいろな討議をしたことです。大学生は遊んでいるとかよく言われますが、決してそればかりではありません。みんなしっかりとした考えを持って、精一杯生きている姿にとても心を奪われました。

3つ目は、私の大学である長崎大学のメンバーのいい所をたくさん見せてもらったことです。2日目にメンバーの1人が山の家で酔いつぶれたとき、ほとんど夜も寝ずに看病していたことはすごく感動しました。登山の時もいろんなことを話したりして、いろいろなみんなのいい面が見ることができて、大好きになりました。本当にみんな、ありがとうございました。

あと、これだけすばらしい合宿になれたのも影の力があってのことです。すべての先生方、学生の

みなさん、管理人さん、食事を作ってくださったおばさん達、すべての方、本当にありがとうございました。きっとこの合宿は一生忘れられない思い出になります。また、みんなと会いたいです。

(長崎大学・女)

私は、この合宿研修に参加して本当に良かったと思う。九州・沖縄の文化についても深く考えさせられ、またそれ以上に、各大学の人々の自分とは異なった考え方、価値観をもっている人々と接することができたからだ。昼間の講義ではまさに、本当に深刻な問題を、他の人々の意見を聞き深くとらえることができた。しかし、深くとらえすぎ、個々の問題が私の心のなかで別の人間の本質などの問題と結びつき、自分は何をまず行動に移さなければならないのか、そして、何が解決策で人々が幸福になるのかといった明確な回答をえることができなかった。だから講義中の質問や意見を言う時間ときには、これを質問しようと決めるのだが、その質問について、深くとらえ、頭の中での自問自答となり、手を上げての発表ができずじまいだった。すなおにふと思いついた率直な意見・感想を発表できれば良かったと思う。

夜の他大学の人々との交流では、様々な考え方、価値観を聞き、自分という範囲がずい分広がったように思う。そのさい、他人の価値観と自分の価値観で全く同じという人はいないと思う。どこかの面で理解しがたい側面がある。そこのところをお互いの意見を聞きあって、自分の価値観をおしつけるようなことはしないで、相手を自分とは違った価値観をもつ素晴らしい人間として、認めていく必要があると思う。他大学の人の、立派な素晴らしい人間の生き方の考えを聞き、また自分もそれに対する素直な意見を言うことができ本当に意義あるものだった。

(熊本大学・男)

はじめは、2単位もらうために参加しようという考えだけでした。熊本大学は、50人ほど参加希望者がいて、レポートで選ばれました。毎週火曜日に集まって勉強会を開いていて、なんかめんどろだなと思ったこともありました……。私は1回も発表できませんでした。思っていることを言おうとしても、うまく考えがまとまりませんでしたし、立派なことは言えないなどと、すべて自分の意見の発表というものを悲観的に考えていました。今になって、後悔しても仕方ありませんので、私は皆の意見、様々な意見が聞けたということだけで満足です。ああ、このような考え方もあるのかと、人生経験において大変プラスになることをたくさん吸収しました。文化という、一見難しそうに思える題材でしたが、文化は私達のすぐ身近にあるものなのだと感じました。人間の行動1つ1つが、文化に

結びついていくのです。この合宿で多くの友人ができました。それも文化発展の1つだと思います。お互いに自分の思っていることを言いあって、それについて考えることはすばらしいことだと思います。また、1つの新しい文化の芽生えにつながるようなことができたような気がします。懇親会では、講義とはまた違った文化について、心で語りあえたのではないのでしょうか。はじめに考えていたことは、すべてうちくだかれて、とてもためになる合宿だったと思います。これからも、このメンバーでまた様々な交流を深めていきたいと思っています。合宿で学んだことを心において、一步一步進んでいこう。

(熊本大学・女)

私はこの合宿に来て、あまりまじめに授業を受けていないような気がします。確かに友達と夜さわぐのは楽しいですがしかし、その分授業をまじめに受け、そして討論に参加できなかったことをたいへん残念に思っていて、もう少し日数があつたら、私も討論に参加し、自分の意見を発表したかっと思っと思っています。しかし、そう思っても後の祭りで、だから来年またこの合宿に来れるのなら参加し、その時こそ自分の意見も発表したいと真剣に思っています。この合宿に来て、本当に良かったと思つたのは、この最後の討議です。皆、自分の意見をしっかりとっていて、発表できた人がうらやましく思っています。中でも、琉球大の人が自分の気持ちをうまく伝えることができないからと楽器でその気持ちを伝えたのは、まさにそれが文化なのだと思つたし、それ以上に心がジーンと熱くなりました。きっと言葉で伝えるよりも感動が大きかつたし、とてもすてきに見えました。そして周りを見回して見ると、目に涙をためている人などを見ると、素直に感動できる人がうらやましくも、すてきに見えます。しかし私も実際、皆の話を聞いて、目頭が熱くなり、これでこのまま皆と別れてしまうのが残念でしかたがなく、また、意見を発表できなかった自分がなさけなく後悔しています。最後の討議で、こんなことに気づくなんて、とてももったいなく、残念でなりません。もっと皆と話し、色々な意見を聞きたかつたと思っています。だからこの後友達になつた人と手紙を交わすなどして、このきずなを切らしたくないと本当に思っています。でもなんだかんだいっても、この合宿に参加して本当に良かったです。

(鹿児島大学・女)

私は、これまで沖縄以外の所に旅行(観光者)としてしか行つた事がなく、そこに住む人(沖縄以外の人)の考え方などを知る事もなく、それを知る機会もありませんでした。しかし、今回、この共

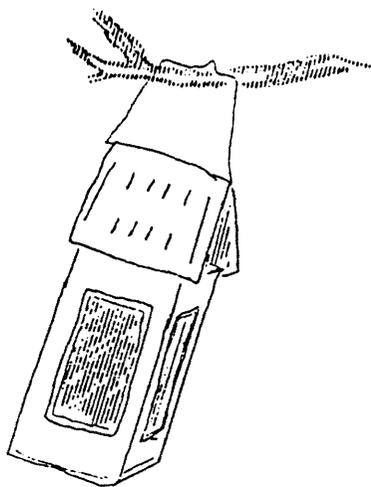
同合宿の4泊5日間を通して、九州のいろんな所の人達の考えに触れる機会を得、地元・沖縄の人とは違った面に出会えとても良かったと思いました。内地の人は、夜の飲み会の騒ぎ方も独特のパワーですごいのですが、昼の討論会の時など、活発な意見を出したり、とても圧倒されるものがありました。皆、自分の考え、意見をもっていて、語らいも豊富でとてもすばらしい人達だと思いました。私も何か意見を言って、討議に参加したかったのですが、何をどう言えばいいのか、手をあげる勇気もなく、周りの人達に圧倒されっぱなしなのがとても残念で、心残りでした。又、琉大の人とばかりかたまってしまって、他大学の人と少数の人としか交流できなかったのが残念でした。又、懇親会の時、私達の余きょうに感動、感激して「沖縄の芸能はすばらしいね。ありがとう」とか言われた時は、とてもうれしくて、このために皆で每晚練習してきて良かったと思いました。そして、明日はいよいよ皆ともお別れで、自分のしゃべっていなかった人達としゃべるぞと、懇親会後の飲み会を楽しみにしていたのに、途中で解散になってしまい、それがとてもやさしかったような気がします。次回の共同合宿では、その事について私達も大学生で自分のしている事を分かっているし、責任も取れると思うので、もっと考慮してほしいと思いました。今回の共同合宿では、たくさんの得る事があり、来て本当に良かったと思いました。

(琉球大学・女)

最初、私は、この共同授業に対して、三味線を引いてみんなを驚かせてやろうと思っていましたが、それはとてもごうまんな考えだと気付きました。みんなの意見を聞くと、文化とはそんなに特別なものじゃなくて、そんなにかっこつけるものでもなく、やってる人がそんなにえらい人でもないと思うようになってしまいました。たまたま自分は芸能をやっているだけであって、その他の方面で頑張っている人はたくさんいるのです。たまたま伝統芸能っていうのは、現代社会においては特異なものであるし、記事になりやすい。みんなも、もの珍しがつて集まってくる。でも、それだけで満足してしまっているのだろうか。今日みんなはそれぞれの地へ帰るわけだけど、帰ったあとどうするだろうか。活動する、行動してみるのも1つの手だと思うが、そのままその状況をながめているのも1つの方法、もっといえばそれがその人なりの行動だと思う。自分たちの文化にはほりこりを持ち、やっていくことはすばらしいことだ。でも、それがすべてではない。他にも、いいものはたくさんあるんだ。若者というのは、自信過剰あるいは自信不足の両極端であると思う。それはそれで、パワーがありいいことなのだが……。今回の共同授業で、みんなにかしら考えるものがあつたであろう。それは、人によって違うのは当然であるし、みんながよく考えるということはいいんだけど、あまりみんなが意気投合しちゃうのはこわいと思う。最後の全体討議で、みんなが我も我もとなつたのはとてもすごいことだ

けど、少しちがった見方をすればこんなところにおしこまれて、数日間を過ごす、一種の集合精理でみんなのテンションが上がっていくのは当然であろう。心の高ぶり、ときめきと現実、このギャップが大きすぎるがためにみんな、悩みいやになるのだろう。2者の接点を見つけること、2者は多分決して同じものではないだろう。それはそれとして納得してしまうのはどうだろうか——。これは自分に対する問いかけでもあり、永遠のものであり——解決せんといけんことでもある。

(琉球大学・男)



出湯の窓に夜霧来て

せせらぎに寝る山宿に

一夜を憩う山男

星を仰ぎて明日を待つ

V. 第19回合宿共同授業参加者名簿

① 教職員

福岡教育大	学務係長 古賀 義伸	助教授 平井 一臣
助教授 中木 達幸	学務係員 石橋 敏和	学生係員 泊 伸人
九州大学	会計係長 石丸 將敏	琉球大学
大学教育研究センター長	長崎大学	教養部長 彌 益輝文
原田 溥	教授 猪山 勝利	教授 宮城 雄清
助教授 井上 眞理	助教授 上江田 一雄	教授 山里 純一
講師 山本 教人	教務係員 吉田 恭二	助教授 長井 孝一
事務長補佐 空閑 龍二	熊本大学	助教授 福島 良一
修学指導主任 因幡 茂幸	助教授 長谷 義隆	助教授 大胡 太郎
修学管理主任 津山 洋幸	教務係員 南部 元義	事務長 金城 幸秀
九州芸術工科大学	大分大学	学務係長 平良 雅彦
助教授 菊地 和夫	講師 平井 敏彦	学務係主任 慶田 恭二
九州工業大学	宮崎大学	学務係主任 平田 勉
助教授 長谷 安朗	教授 青木 眞則	学務係主任 大城 ちか子
佐賀大学	教務係員 押川 美紀	学務係員 喜納 政国
教授 池田 行伸	鹿児島大学	鹿屋体育大学
大学教育センター教務委員	教授 志賀 美英	助教授 平沢 信康
久永 義裕		

② 学 生

福岡教育大学 (3名)	九州大学 (12名)	7. 山下 徹 (工)
1. 前田 祥宏 (教育)	1. 池田 裕子 (文)	8. 松尾 好恵 (工)
2. 田畑 洋一 (教育)	2. 渋谷 定則 (法)	9. 山本 達也 (工)
3. 今村 みずほ (教育)	3. 前田 善弘 (法)	10. 越智 学 (工)
	4. 松永 千鶴 (法)	11. 久間 啓司 (工)
	5. 山田 めぐみ (法)	12. 橋口 美保子 (農)
	6. 安原 薫 (工)	

九州芸術工科大学（5名）

1. 大窪 富美夫（芸術）
2. 井上 聡（芸術）
3. 山根 淳文（芸術）
4. 稲津 慎司（芸術）
5. 池永 薫（芸術）

九州工業大学（2名）

1. 野々下 亨（工）
2. 本村 紀隆（工）

佐賀大学（10名）

1. 松尾 素美子（教育）
2. 筒井 美香（教育）
3. 土谷 邦人（理工）
4. 宮原 太士（理工）
5. 米原 敏徳（理工）
6. 岡澤 智（理工）
7. 寺内 智子（理工）
8. 徳丸 幸子（理工）
9. 草野 昭子（理工）
10. 中山 浩明（理工）

長崎大学（9名）

1. 志岐 千木仁（教育）
2. 田淵 大志（教育）
3. 小林 文裕（教育）
4. 吉村 真弓（教育）
5. 本多 雄也（教育）
6. 水浦 真紀子（教育）

7. 中村 宏子（経済）

8. 柳田 裕美子（経済）

9. 尾崎 智成（工）

熊本大学（10名）

1. 彭 海奇（文）

2. 野田 和宏（文）

3. 今村 初美（教育）

4. 前田 健悟（法）

5. 板井 志保（理）

6. 北村 かおり（理）

7. 吉岡 香織（理）

8. 山崎 知子（理）

9. 宮本 美紀（工）

10. 王 斗艶（工）

大分大学（3名）

1. 橋本 知彦（経済）

2. 島田 芳之（経済）

3. 田口 智美（教育）

宮崎大学（6名）

1. 堀内 圭太郎（農）

2. 米村 久大（農）

3. 渡辺 悌一郎（教育）

4. 冨田 直樹（工）

5. 渕上 泰明（工）

6. 山中 誠（工）

鹿児島大学（10名）

1. 安達 嘉史（教育）

2. 松岡 亜紀（教育）

3. 小牟田 啓行（工）

4. 仮屋 美穂（教育）

5. 外山 弥枝（教育）

6. 力田 玲（教育）

7. 益永 高志（工）

8. 白石 貴司（工）

9. 須田 英太郎（工）

10. 新保 正康（農）

琉球大学（12名）

1. 田盛 善宏（法文）

2. 前山 智美（法文）

3. 宮良 加恵（法文）

4. 波平 美穂（法文）

5. 大濱 史子（教育）

6. 金城 絵理香（教育）

7. 屋嘉部 希（教育）

8. 長浜 大樹（理）

9. 金城 真希（理）

10. 横山 陽一（理）

11. 西原 靖文（工）

12. 橋尾 光美（農）

鹿屋体育大学（2名）

1. 荒木 龍起（体育）

2. 熊谷 友敬（体育）

VI. 第19回合宿共同授業事務日程

平成5年11月11日～12日	九州地区国立大学教養部長会議（於：熊本大学）
11月15日	企画委員会開催通知 [主管校から]
12月17日	企画委員会（於：九州大学）
12月中旬	『平成5年度経費支出報告書』と『平成6年度教育方法等改善経費要求書』の提出依頼 講義題目等の推薦依頼 [主管校から各大学へ]
平成6年1月中旬	『平成5年度経費支出報告書』及び『平成6年度経費要求書』の提出締切 [各大学から主管校へ]
1月中旬	講義題目等の推薦締切 [各大学から主管校へ]
1月下旬	講義題目等の調整・決定 [当番大学] 経費支出報告書の提出 [主管校から文部省へ]
2月上旬	講義題目等の決定通知 講義等担当教官の推薦依頼、及び「講義要旨」の原稿提出依頼 [主管校から各大学へ]
2月下旬	『平成6年度カリキュラム改革調査研究経費要求書』提出 [主管校から文部省へ]
3月中旬	講義等担当教官の推薦書、「講義要旨」提出 [各大学から主管校へ]
3月中旬	実施委員会開催通知 [主管校から各大学へ]
4月中旬	実施委員会（於：九州大学）
5月上旬	実施（学生募集等）について通知 [主管校から各大学へ]
5月下旬	参加人員の調整 [当番大学]
7月9日～13日	実施（於：九重）
7月中旬	報告書原稿の依頼 [主管校から参加教職員へ]
8月下旬	報告書原稿の提出締切
11月下旬	報告書を各大学等へ送付 [主管校から]

Ⅶ. 参 考 資 料

1. 第 1 回九州地区国立大学間合宿共同授業の 実施経緯について

1. 昭和51年9月中旬に、九州大学武谷健二学長から奥田教養部長に、文部省・学長レベルの意向として、『国立大学間合宿共同授業』の試みにつき、その趣旨等の説明があり、九州地区で実施の見込みがあるかどうか検討してほしいとの勧めがあった。
2. この学長の意向をうけて奥田教養部長は、昭和51年10月6～7日の両日に開催された第25回九州地区大学一般教育研究会（於・大分大学）の際に、それに出席した長瀬佐賀大学教養部長、西岡熊本大学教養部長、高橋長崎大学教養部長の三人と会合し、共同授業の構想についての概要を説明し、意見を求めた。これら3大学の教養部長からは、いずれもこれに賛成する旨の意向が示され、九州大学が主催して、2月末から3月にかけてと、3月中旬の、前後2回に分け、長崎県島原市九州地区国立大学島原共同研修センターを会場とし、3泊4日の会期で、それぞれ100人ずつの規模によりこれをおこなうことに、意見の一致をみた。なお各大学では、このための部内態勢をそれぞれ整えることについても、申合わせがなされた。

共同授業の実施を前後2回に分けたのは、参加希望者が多いであろうとの予想と、入学試験の第一期校と第二期校の間には、2～3月の学内行事予定に差異があるので、参加の便宜を考慮する必要があるという事情との2つの理由による。なお当初は、第1回は文系講義に、第2回は理系講義に、それぞれ重点をおくことが予定されていた。

3. 本共同授業の具体的計画は、昭和51年10月19日～21日の両日に開催された九州地区国立大学教養部長会議（於琉球大学）に正式議題として発議され、上記4大学のほか、鹿児島、琉球両大学も強い参加の希望を表明したので、これら2大学を加えて、参加大学を6大学とすること、及び今回の計画と実施には九州大学が当るなどの合意が成立、同時期に開催中であった6大学事務長会議にも報告し、了承された。
4. 各大学内でこの共同授業に対する態勢を整える必要上、昭和51年11月8日付で、九州大学武谷健二学長により、佐賀、長崎、熊本、鹿児島、琉球の各大学長あてに、この共同授業に対する協力の依頼、及び計画の具体化に関する事務連絡は九州大学教養部長を中心とする各大学教養部長間でおこなうことが適切であると思われることなどの、二点を提案する書簡が送られた。

また同日付を以て、武谷学長から奥田教養部長あてに、共同授業の今後の企画運営等につき依頼状が送られた。

5. この依頼をうけて奥田教養部長は、昭和51年11月11日前記5大学教養部長あてに、共同授業の実施計画試案を送付し、各大学派遣の講師名及びその講義テーマの回答を求めた。
6. 11月25日までに、各教養部長から参加する旨の回答が寄せられたが、琉球大学を除く各大学の場合、講師及びその講義テーマについては未定である旨の内容であった。九州大学教養部においては、この間11月17日の教授会に正式に提案され、「総合科目」として単位を認定することの可否については、本教養部内の総合科目委員会で検討し決定するとの合意を得ている。当委員会では、「2単位の認定には、計画案に予定されている授業時間数がやや不足しているのではないのかとの疑義が残るが、基本的には参加学生に総合科目として2単位を認定してよいであろう」との結論が得られた。
7. 九州大学のほか、佐賀・琉球の両大学では、総合科目として2単位を認定することとなった。しかし、長崎・熊本・鹿児島島の3つの大学は、学内的に機が熟していないとの理由などで、今回は単位認定は行わない旨の通知があった。また九州大学教養部内では、共同授業を本年度2回に分けておこなうことは、事務取扱い上、難点があるとの意見があったので、3月中旬の1回だけに止めることで、関係各大学に通知し、了解をえることができた。
8. 九州大学は、以上のような経緯を経て共同授業実施具体案（要項案）を作成し、昭和51年12月25日付で、これを関係各大学に送付した。奥田教養部長は、単位認定をおこないうるように、この共同授業の形式をととのえるために、12月中旬文部省大学課と事務打合わせをおこなったが、このことについては、上記具体案のなかに、備考として次のごとく付記してある。すなわち、「この共同授業は、形式上は当該大学の授業の一部として取扱われるものであるので、単位認定等については、当該大学の教授会が自主的に判断することになる。したがって単位認定のためには、参加大学は最低一名の講師をこの共同授業に参加させなければならない」というのがその内容である。
9. 昭和52年1月27日～28日の両日、九州大学教養部の因幡庶務掛長と松崎教務掛長は、島原市に出張し、共同研修センター及び市内の状況を見下して、日程消化上の留意点などをチェックした。
10. 昭和52年2月1日、奥田教養部長名で関係各大学教養部長あてに、実施要項とともに、受講学生募集の開始、参加学生名簿の作成、引率責任教官（又は事務官）名及び参加教職員氏名ならびにその滞在予定（なお教官は全日程に参加することを原則としている）につき、2月25日までに返答するよう、依頼状を発送した。
11. 九州大学では、実施要項案の作成及び共同授業の企画・実施に際しては、学生たちのニーズとプログラムとの適合性を高め、本共同授業の運営と成果をよりよいものとするため、講義担当の講師以外に、とくに学生指導担当として、安藤延男教授の参画を求めた。

2. 合宿共同授業の実施経緯（第1回から第19回まで）

（注1）主管校は第1回から全て九州大学

（注2）参加人員の（ ）は教職員の内数

第1回

メインテーマ 『戦後世界における日本』
開催期間 昭和52年3月9日（水）～12日（土）3泊4日
開催場所 九州地区国立大学島原共同研修センター（当番校：九州大学）
参加人員 九州 37(9)名、佐賀 15(2)名、長崎 6(3)名、熊本 16(1)名、
鹿児島 15(2)名、琉球 14(2)名 合計 6大学 103(19)名

第2回

メインテーマ 『現代の人と自然』
開催期間 昭和52年7月11日（月）～15日（金）4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所（当番校：九州大学）
参加人員 九州 34(12)名、佐賀 16(2)名、長崎 10(2)名、熊本 13(2)名、
鹿児島 16(2)名、琉球 18(3)名 合計 6大学 107(23)名

第3回

メインテーマ 『現代の人と自然』
開催期間 昭和53年7月11日（火）～15日（土）4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所（当番校：九州大学）
参加人員 九州 27(6)名、芸工大 5(1)名、佐賀 17(2)名、長崎 12(2)名、
熊本 16(3)名、大分 6(1)名、宮崎 6(1)名、宮崎医 4(1)名、
鹿児島 17(2)名、琉球 17(2)名 合計 10大学 127(21)名

第4回

メインテーマ 『現代の人と自然』
開催期間 昭和54年7月12日（木）～16日（月）4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所（当番校：九州大学）
社会福祉法人 朝日高原福祉センター（当番校：熊本大）

参加人員 福岡教 7(1)名、九州 43(8)名、芸工大 8(1)名、佐賀 23(3)名、
長崎 18(2)名、熊本 33(13)名、大分 12(3)名、宮崎 5(2)名、
宮崎医 5(1)名、鹿児島 17(4)名、琉球 26(2)名
合計 11大学 197(40)名

第5回

メインテーマ 『現代社会の諸問題』
開催期間 昭和55年7月11日(金)～15日(火) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
社会福祉法人 朝日高原福祉センター(当番校:熊本大)
参加人員 福岡教 2(1)名、九州 48(9)名、芸工大 6(1)名、九州工 3(2)名、
佐賀 22(3)名、長崎 9(3)名、熊本 35(13)名、大分 11(2)名、
宮崎 5(2)名、宮崎医 5(1)名、鹿児島 19(3)名、琉球 26(2)名
合計 12大学 191(42)名

第6回

メインテーマ 『現代社会の諸問題』
開催期間 昭和56年7月11日(土)～15日(水) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学島原共同研修センター(当番校:長崎大学)
国民宿舎(ユースホステル)青雲荘(当番校:九州大学)
参加人員 福岡教 3(1)名、九州 53(9)名、芸工大 7(1)名、九州工 2(1)名、
佐賀 25(4)名、長崎 21(7)名、熊本 10(3)名、大分 11(2)名、
宮崎 7(2)名、宮崎医 3(2)名、鹿児島 19(3)名、琉球 35(2)名
合計 12大学 196(37)名

第7回

メインテーマ 『コミュニケーション』
開催期間 昭和57年7月12日(月)～16日(金) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
九州地区国立大学島原共同研修センター(当番校:長崎大学)

参加人員 九州 60(1)名、 芸工大 11(1)名、 九州工 1(1)名、 佐賀 32(3)名、
長崎 14(8)名、 熊本 12(2)名、 大分 10(2)名、 宮崎 5(1)名、
宮崎医 6(1)名、 鹿児島 18(3)名、 琉球 31(2)名
合計 11大学 200(35)名

第8回

メインテーマ 『男と女』
開催期間 昭和58年7月16日(土)～20日(水) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
九州地区国立大学島原共同研修センター(当番校:佐賀大学)
参加人員 福岡教 2(0)名、 九州 47(1)名、 芸工大 21(2)名、 九州工 1(0)名、
佐賀 36(3)名、 長崎 7(2)名、 熊本 11(1)名、 大分 9(2)名、
宮崎 4(1)名、 宮崎医 6(1)名、 鹿児島 19(4)名、 琉球 34(4)名
合計 12大学 197(4)名

第9回

メインテーマ 『世界の中の日本』
開催期間 九重分校:昭和59年7月14日(土)～18日(水) 4泊5日
島原分校:昭和59年7月11日(水)～15日(日) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
九州地区国立大学島原共同研修センター(当番校:佐賀大学)
参加人員 九州 55(2)名、 芸工大 15(2)名、 九州工 2(1)名、 佐賀 39(2)名、
長崎 3(1)名、 熊本 10(2)名、 大分 11(2)名、 宮崎 2(1)名、
宮崎医 5(1)名、 鹿児島 19(4)名、 琉球 34(4)名
合計 11大学 195(4)名

第10回

メインテーマ 『世界の中の日本—世紀末から21世紀へ—』
開催期間 昭和60年7月12日(金)～16日(火) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
九州地区国立大学島原共同研修センター(当番校:鹿児島大学)

参加人員 九州 47(10)名、 芸工大 12(1)名、 九州工 3(1)名、 佐賀 23(4)名、
長崎 4(1)名、 熊本 13(2)名、 大分 14(2)名、 宮崎 4(1)名、
宮崎医 4(2)名、 鹿児島 43(13)名、 琉球 36(6)名
合計 11大学 203(43)名

第11回

メインテーマ 『地域の視点から』
開催期間 昭和61年7月16日(水)～21日(月) 5泊6日
開催場所 国立沖縄青年の家(当番校:琉球大学)
参加人員 福岡教 7(2)名、 九州 37(7)名、 芸工大 11(1)名、 九州工 3(1)名、
佐賀 33(4)名、 長崎 13(2)名、 熊本 17(2)名、 大分 13(2)名、
宮崎 6(1)名、 宮崎医 3(1)名、 鹿児島 27(3)名、 琉球 105(31)名
合計 12大学 275(57)名

第12回

メインテーマ 『地域からの視点』
開催期間 昭和62年7月11日(土)～15日(水) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:九州大学)
参加人員 福岡教 8(1)名、 九州 25(10)名、 芸工大 6(1)名、 九州工 3(1)名、
佐賀 12(2)名、 長崎 7(2)名、 熊本 14(4)名、 大分 7(1)名、
宮崎 7(1)名、 宮崎医 2(2)名、 鹿児島 11(2)名、 琉球 17(2)名
合計 12大学 119(29)名

第13回

メインテーマ 『地域を視つめて』
開催期間 昭和63年7月14日(木)～18日(月) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:熊本大学)
参加人員 福岡教 4(0)名、 九州 20(4)名、 芸工大 6(1)名、 九州工 1(1)名、
佐賀 10(1)名、 長崎 11(2)名、 熊本 24(13)名、 大分 10(2)名、
宮崎 6(0)名、 鹿児島 12(2)名、 琉球 17(2)名
合計 11大学 121(28)名

第14回

メインテーマ 『国際化を考える』
開催期間 平成元年7月12日(水)～16日(日) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:琉球大学)
参加人員 九州 20(5)名、芸工大 6(1)名、九州工 1(1)名、佐賀 15(5)名、
長崎 11(2)名、熊本 13(3)名、大分 10(1)名、宮崎 10(2)名、
鹿児島 12(2)名、琉球 30(4)名
合計 10大学 128(36)名

第15回

メインテーマ 『生活と科学』
開催期間 平成2年7月12日(木)～16日(月) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:佐賀大学)
参加人員 福岡教 2(2)名、九州 20(5)名、芸工大 6(1)名、九州工 3(1)名、
佐賀 28(9)名、長崎 14(4)名、熊本 12(2)名、大分 9(1)名、
宮崎 9(2)名、鹿児島 11(2)名、琉球 17(2)名
合計 11大学 131(41)名

第16回

メインテーマ 『九州・沖縄-その文学と風土-』
開催期間 平成3年7月12日(金)～16日(火) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:長崎大学)
参加人員 福岡教 4(3)名、九州 19(5)名、芸工大 6(1)名、九州工 3(1)名、
佐賀 12(2)名、長崎 24(4)名、熊本 14(4)名、大分 7(2)名、
宮崎 5(2)名、鹿児島 13(3)名、鹿屋体 4(1)名、琉球 16(2)名
合計 12大学 127(40)名

第17回

メインテーマ 『九州・沖縄-その風土と生態-』
開催期間 平成4年7月11日(土)～15日(水) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:鹿児島大学)

参加人員 九州 19(5)名、芸工大 6(1)名、九州工 4(1)名、佐賀 12(2)名、
長崎 10(2)名、熊本 14(4)名、大分 6(1)名、宮崎 7(2)名、
鹿児島 21(1)名、鹿屋体 4(1)名、琉球 18(3)名
合計 11大学 121(33)名

第18回

メインテーマ 『九州・沖縄地域の開発と生活・環境』
開催期間 平成5年7月10日(土)～14日(水) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:熊本大学)
参加人員 福岡教 5(2)名、九州 15(5)名、芸工大 5(1)名、九州工 7(1)名、
佐賀 12(2)名、長崎 10(2)名、熊本 19(9)名、大分 7(1)名、
宮崎 8(2)名、鹿児島 12(3)名、鹿屋体 5(1)名、琉球 16(4)名
合計 12大学 121(33)名

第19回

メインテーマ 『九州・沖縄の自画像－過去・現在・未来－』
開催期間 平成6年7月9日(土)～13日(水) 4泊5日
開催場所 九州地区国立大学九重共同研修所(当番校:琉球大学)
参加人員 福岡教 4(1)名、九州 18(6)名、芸工大 6(1)名、九州工 3(1)名、
佐賀 15(5)名、長崎 12(3)名、熊本 12(2)名、大分 4(1)名、
宮崎 8(2)名、鹿児島 13(3)名、鹿屋体 3(1)名、琉球 24(12)名
合計 12大学 122(33)名